メキシコ合衆国における地震被害に対する
国際緊急援助隊救助チーム
活動報告書

平成 30 年 8 月
（2018 年）

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

緊 援
Ｊ Ｒ
18-001

メキシコ合衆国における地震被害に対する
国際緊急援助隊救助チーム
活動報告書

平成 30 年 8 月
（2018 年）

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

序　　文

2017 年 9 月 19 日メキシコ合衆国時間 13 時 14 分（日本時間 9 月 20 日 3 時 14 分）に同国中部で発生した地震は、首都メキシコシティを中心に甚大な被害を及ぼしました。

日本国政府は発災当日（日本時間）にメキシコ合衆国政府からの要請を受け、同日中に国際緊急援助隊救助チームの派遣を決定し、翌 21 日に被災国に向けてチームを派遣しました。

救助チームは首都メキシコシティに到着後、被災国政府、現地大使館、JICA 現地事務所等と連携し、メキシコシティ内において迅速に活動を開始し、現地の救助関係者との共同作業を含め 4 日間の捜索救助活動を展開しました。残念ながら生存者の発見には至りませんでしたが、発災後 120 時間以上を経て飼い犬 1 頭を倒壊家屋の中から救出する等、チームの献身的な活動にはメキシコ合衆国政府や市民から大きな感謝の念が示されました。

本報告書は同チームの活動内容を報告するものです。

今後、メキシコ合衆国の一日も早い復旧・復興と、被災者の暮らしの安定と幸福を心よりお祈りいたします。

平成 30 年 8 月

独立行政法人国際協力機構
国際緊急援助隊事務局長　高橋　政俊

目　　次

序　文
目　次
写　真

第１章　被災概要.....1
　１－１　被災状況.....1
　１－２　メキシコ政府の対応.....1
　１－３　各国の救助支援概要.....1
　１－４　日本の対応.....1

第２章　救助チーム派遣概要.....2
　２－１　派遣日程.....2
　２－２　チーム構成.....2
　２－３　活動概要.....2

第３章　活動報告.....3
　３－１　団　長.....3
　３－２　副団長（広報・記録）.....7
　３－３　副団長（計画・情報分析）.....8
　３－４　副団長（安全管理）.....10
　３－５　副団長（連絡調整ロジ）.....14
　３－６　メディカルマネジャー.....17
　３－７　中隊長.....19
　３－８　チーフハンドラー.....21
　３－９　構造評価.....23
　３－10　通信班.....27
　３－11　業務調整員.....28
　３－12　先遣隊.....36

付属資料
　１．活動日程.....43
　２．メンバーリスト.....44
　３．駐日メキシコ大使感謝状.....46
　４．報道資料.....47
　５．活動日報.....49
　６．国連人道問題調整事務所による状況報告書.....63
　７．メキシコ合衆国政府に提出した報告書.....64

写　　真

メキシコに向けて成田空港出発（第 2 陣）

指揮本部における決定会議

ブリターニャでの救出活動

ファイバースコープによる捜索活動

現場指揮本部における救出活動方針の検討

飼い犬の救出（トラルパン）

メキシコ政府による式典

地元の少女からペンダントを
受け取る隊員

活動拠点（Bo0）での集合写真

第１章　被災概要

１－１　被災状況

9 月 20 日 3 時 14 分（日本時間）、メキシコ合衆国（以下、「メキシコ」と記す）中部プエブラ州において、マグニチュード 7.1 の地震が発生した。地震の揺れは近隣の中南米諸国でも感じられ、同国南部ではその後もマグニチュード 5 以上の余震が続いた。被災状況は以下のとおり。

発生日時：2017 年 9 月 20 日 3 時 14 分（日本時間）
震 源 地：メキシコ中部プエブラ州（州都プエブラ・デ・サラゴサから南東へ約 55km 地点）
被災状況：震源地のプエブラ州、周辺のメキシコシティ、モレロス州、ゲレロ州等で家屋の倒壊、インフラへの被害等が発生。メキシコシティ内では数十の中高層建築物が倒壊し、基幹病院 3 院も被災した。

- 死　者　数：361 名（10 月 1 日時点、メキシコ政府発表）
- 被災家屋数：2 万 3,498 棟（10 月 1 日時点、メキシコ政府発表）

１－２　メキシコ政府の対応

市民保護局を中心に、連邦政府及び市政府当局、軍関係者、連邦警察等から構成される現地災害対策本部（LEMA）を市内中心部の連邦政府施設に設置。各国から支援に入った捜索救助チームに対しては、外務省及び捜索救助担当者のリエゾンを配置。国際捜索救助諮問グループ（INSARAG）の調整手法にはよらず、メキシコ政府自体が国際捜索救助チームも含めた全捜索救助活動を統括した。LEMA では毎日朝と夜に調整会議が開催された。

１－３　各国の救助支援概要

日本を含む 9 カ国が政府の捜索救助チームを派遣（多くはメキシコ周辺国）。うち INSARAG 認証チームは 3 チーム（日本、米国、スペイン）。

１－４　日本の対応

メキシコ政府の要請を受け、日本は以下のとおり国際緊急援助隊救助チームを派遣した。

- 派遣期間：2017 年 9 月 21 日～28 日
- 派遣隊員数：72 名

第２章　救助チーム派遣概要

２－１　派遣日程

2017 年 9 月 21 日～28 日（8 日間）
※活動日程は付属資料 1 参照。

２－２　チーム構成

計 72 名

- 団長 1 名（外務省）
- 副団長 4 名（警察庁 1、消防庁 1、海上保安庁 1、JICA1）
- メディカルマネジャー1 名（医師）
- チーフハンドラー1 名（警察庁）
- 中隊長 2 名（警察庁 1、消防庁 1）
- 中隊長サポート 2 名（警察庁 1、消防庁 1）
- 小隊長 4 名（警察庁 1、消防庁 2、海上保安庁 1）
- 救助隊員 36 名（警察庁 12、消防庁 12、海上保安庁 12）
- 通信班 2 名（警察庁 2）
- ハンドラー4 名（警察庁 4）、救助犬 4 頭
- 医療班 4 名（医師 2、看護師 2）
- 構造評価専門家 2 名
- 業務調整員 9 名（JICA7、JOCA2）

※メンバーリストは付属資料２参照。

２－３　活動概要

9 月 21 日の現地入り以降、メキシコシティ内の 3 サイト（ブリターニャ、オブレゴン、トラルパン）にて捜索・救助活動を実施。9 月 22 日未明にブリターニャのサイトで 1 体の女性のご遺体を収容、9 月 24 日午後にトラルパンのサイトで倒壊建物内から飼い犬 1 頭を救出、飼い主に引き渡した。

第３章　活動報告

３－１　団　長

外務省国際協力局緊急・人道支援課　川崎　敏秀

（1）総　論

2017 年 9 月 19 日（火）午後 1 時過ぎ（日本時間 20 日未明）、メキシコにおいて、マグニチュード 7.1 の激しい地震が発生し、メキシコ市内においても多くの高層ビルが倒壊したほか、多数の死傷者が発生したことを受け、メキシコ政府から同日深夜（日本時間 20 日午後）二国間関係に基づいてわが国国際緊急援助隊（JDR）捜索・救助チームの派遣要請が行われ、わが国は、メキシコとの友好関係にかんがみ、人道支援の観点から、日本時間 9 月 20 日（水）午後 JDR 派遣を決定した。

メキシコへのフライトの制約はあったものの、JDR 捜索・救助チームは発災後 48 時間の 21 日（木）午後メキシコシティに到着し、空港からメキシコ政府緊急災害対策本部（以下、「LEMA」とする）に直行し、到着報告を行うとともに、市内ブリターニャ通り 81 番の倒壊集合住宅現場（現場 A とする）の捜索・救助の要請を受けた。

これにより、JDR 捜索・救助チームは 21 日（木）午後から現場 A での ASR2 活動及び第 1 中隊による救助活動を開始するとともに、同日夜からは LEMA から緊急要請を受け、第 2 中隊によるアルバロ・オブレゴン通り 286 番の倒壊オフィスビル（現場 B とする）での捜索・救助活動を開始した。これにより、到着初日から第 1 中隊及び第 2 中隊とも 24 時間体制での活動を行うこととなった。

なお、21 日（木）午後 10 時の LEMA 会議において、市内南部トラルパン通りにある第 3 番目の倒壊集合住宅（現場 C とする）の捜索・救助作業が要請されたが、JDR としては活動中のいずれかが終了した時点で現場 C での活動を検討する旨説明した。

22 日（金）未明、現場 A において要救助者の女性を収容し、医療班による死亡確認後、メキシコ政府に引き継ぐとともに、現場 A におけるそれ以上の生体反応がないことを確認した。このため、JDR としては現場 A での救助活動の終了及び第 1 中隊の撤収、並びに同中隊休息後の現場 C での救助活動を行うことを決定し、LEMA にその旨電話連絡するとともに、22 日（金）午前、現場 C における第 1 中隊による捜索活動を行い、その結果、打音反応があり、早急な全面的な救助活動の必要性を確認した。

そのころ、現場 B において、第 2 中隊は 22（金）午後も救助活動を継続していたが、メキシコ側及びイスラエル側救助チームから同現場での生存者の見込みはないとして重機による瓦礫の撤去の提案があったため、JDR としては現場 B での緊急の生存者救助の可能性は低いと判断するとともに、JDR としては現場 B での活動を終了し、第 2 中隊の撤収と同中隊休息後、同日深夜から現場 C に派遣することを決定した。なお、現場 C では、JDR 全隊での作業を継続したが、雨により倒壊建物の一部にズレが生じる等、安全上の課題が確認されたため、作業の中断を余儀なくされたのみならず、23 日（土）午前 8 時ごろ、オアハカ州（首都から約 500km）を震源とするマグニチュード 6.2 の地震が発生したため、現場 C での安全確保のため、安全管理計画に基づき、一時避難と安否確認を行うとともに、安全確認までの間、救助活動を中止することと

した。

23 日（土）午後 2 時の LEMA 会議においてその後の対応を検討した結果、構造評価専門家による安全確認を行ったうえでの活動再開が決定され、その後若干の情報の混乱による時間のロスはあったものの、同日午後 7 時から救助活動を再開した。

その後も降雨によるさらなる安全上の問題が生じるなかで慎重に作業を進めたが、24 日（日）午前、倒壊建物内から犬の鳴き声が確認され、種々救助を試みた結果、同日午後 3 時過ぎ犬 1 頭を救出し、メキシコ側に引き渡した。その後の捜索活動により、それ以上の生命体の反応が確認できなかったことから、現場 C からの活動の終了を決定した。

これを受け、24 日（日）夕の LEMA 会議において、上記 JDR の活動を報告したところ、JDR の活動に対する謝意が示された。また、LEMA 側は、他の内外救助チームの報告終了後、これにより新たな救助を要する現場はないとし、今後は中長期的な危険建物等の構造評価の段階に移行したいとして、各捜索・救助チームに対し活動報告と撤収計画書の提出を要請するとともに、25 日（月）午前の Centro Nacional de Alto Rendimiento（CNAR）におけるビデガライ外務大臣によるわが国を含む各国救助隊への感謝式への参加要請があった。これを受け、JDR としては在メキシコ日本大使館及び外務本省との協議を経て、メキシコ地震被害に対する捜索救助任務の終了と帰国を決定した。

(2) 評価と課題

1) 派遣要請と調整メカニズム

今回の捜索・救助チームの派遣は、1987 年の「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」制定から 30 周年目の派遣であるとともに、2010 年に INSARAG（国際捜索救助諮問グループ）の「Heavy（ヘビー）」認定を受けてから、「Heavy」級捜索救助チームとしては、2011 年のニュージーランド派遣、2015 年のネパール派遣に続き 3 回目の派遣となった。

また、派遣要請に係る特徴としては、近年、被災国の負担を軽減するための INSARAG 国際調整ルールが確立しており、今回も同国際調整の WEB 上の情報共有システムである VO（Virtual OSOCC：バーチャル現地活動調整センター）（OCHA･FCSS：国連人道問題調整事務所フィールド調整支援課が管理）においては「メキシコ政府からの国際支援の要請はなし」とされているなかで、メキシコ政府からわが国に対して直接派遣要請があったものであり、その背景には日本とメキシコとの歴史的な友好関係及びメキシコ政府内に JDR の能力・技術に対する特別な期待があったことがうかがわれる。小官が LEMA 会議に参加した際に、メキシコ市民保護局の幹部から、1985 年の地震以来、日本はメキシコの防災能力向上のために一貫して協力してくれたとして感謝の言葉や日本での研修で学んだ地震対策が役に立っているとの評価の発言があったことからも、日本とメキシコの間には相当に友好的な外交資産があると感じた。

なお、今次メキシコ地震被害への対応では、わが国以外の捜索救助チームとしては、米国、スペイン、イスラエルのほか、中南米諸国（パナマ、コロンビア、エクアドル、エルサルバドル、ホンジュラス）が救助活動に参加していた。このうち、INSARAG の認証を受けたチームとしては、わが国（「Heavy」）、米国（「Heavy」）、スペイン（「Medium」）の 3 カ国であり、わが国は米国とともに、捜索・救助現場でも、LEMA 会議でも中心的役割を果たすこととなった。

また、今次災害応急対応にあたっては、UNDAC（国連災害評価調整）要員としてチリから1名が派遣されていたが、同要員によれば、そもそも国際捜索・救助チームが絶対的に少なかったこと、及びメキシコ政府機能は維持されているなかで被災現場が首都近郊であったこと等を理由に、今次対応では、INSARAG の調整メカニズムであるいわゆる RDC（到着出発センター）並びに OSOCC（災害対応調整センター）及び UCC（捜索・救助チーム間調整会議）は設置せず、UNDAC としてはメキシコ側緊急災害対策本部（LEMA）の計画立案や運営への支援を行うとしていた。結果、LEMA 会議においては内外の災害対応関係者が一堂に会し、直接情報共有と捜索救助現場の割り振りが行われるなど、最近の国際的な救助調整のあり方と比べれば、かなり変則的なものではあったが、今次対応においてはメキシコ政府の意向が救助活動に明確に反映される等有効なあり方であったと考える。逆に、日本隊の人的資源を OSOCC、UCC、SCC（セクター間調整会議）等の調整に割かれることなく、自隊のために有効に活用できたことは大きな成功の要因となったと考える。

2）特殊な派遣環境と円滑な活動環境の構築

今次 JDR 派遣に際しては、メキシコへのフライトに制約（便数及び高地空港への航空機機材等）もあり、同一便で JDR 隊員全員、救助犬並びに必要機材を運び込めないという特殊状況のなかで、現地での JDR 本隊受入調整のために、JICA 業務調整員 2 名が 20 日（水）夕に先発するとともに、JDR 本隊 70 名及び救助犬 4 頭が、翌 21 日（木）午後の 2 便に分かれて出発する（第 1 便は主に指揮本部関係者と救助犬、第 2 便には主に副団長 1 名と隊員が搭乗）等変則的な派遣形態にはなったものの、結果的には本隊の第 1 便が発災 48 時間後にはメキシコの首都に到着することができる等、大型チームとしては、軍用機で移動するイスラエルや航空路の便の良い米国に次ぎ早い到着となった。

今後とも引き続き JDR 派遣フライトの迅速化、安定化について改善策を検討したい。

また、到着時については、在メキシコ日本大使館及び JICA 事務所による事前の調整及び万全の準備により、到着空港での入国、検疫、通関、そして到着後の LEMA 会議への移行が極めてスムーズに行われた。このことは被災国到着時から始まる JDR 活動の初動期における迅速性が課題となるなかで、今次のように、現地在外公館及び JICA 事務所による綿密な連携と万全の準備の重要性を示すグッドプラクティスとして記録したい。

3）活動拠点（BoO）

今次 JDR 活動の拠点（BoO）については、その候補として、在メキシコ日本大使館及び JICA 事務所が事前にメキシコ政府及び現地日系人協会等との調整の下、LEMA が設置されたオリンピック代表強化選手村（CNAR）での野営案、及び日系人協会所有の日墨会館での設置案があったが、余震の影響等の安全管理と活動環境を総合的に勘案した結果、地震による構造上の問題はなく、かつ塀で囲まれた敷地内にありセキュリティが確保できる日墨会館を使用することとした。これにより、大切な人的資源を野営した場合に必要となる BoO 警備に割く必要がなくなり、BoO 運営・隊員の活動支援に重点的に充てることができたのみならず、隊員の生活環境としても、降雨が多く、夜が冷えるこの時期のメキシコでの救助活動後の安全かつ安心な休養時間を確保することができた。また、余震対策としても、敷地内に芝生地やテニスコート用地もあり、安全な一時避難計画も立てやすかった。さらに、会館内倉庫を資機材管理にも

利用できたこと、比較的余裕のある駐車場の半分を援助活動用車両の管理に使用するとともに、会館内のホールやソファ等を関係者（通訳、メキシコ側警備・兵士、運転手等）の待機場所としても活用できたことは JDR 関係要員の管理上大変役に立った。常にこのような環境が得られるとは考えにくいが、BoO 設置のあり得るオプションとして記録すべきと考える。

4）隊員の訓練・研修の重要性

今回の派遣にあたっては、その指揮本部要員はじめ多くの隊員が、2017 年 3 月の総合訓練をはじめ各種訓練・研修の経験者であり、また、団長、副団長全員が同年 9 月のマレーシアにおける地域演習にも参加した経験者であった。かかる研修・訓練の集大成のようなチーム編成であったことが、短期間のチームビルディングと円滑な協調と指揮計画につながったと考える。こうした観点からも平素の訓練・研修がいかに重要かつ意義があるかを証明したといえる。引き続き、各職務における国内での研修・訓練を継続・強化することが重要であるとともに、指揮本部要員については国際調整の機会（INSARAG 地域演習等）への参加を奨励することも重要であると考える。

5）メキシコ政府・国民の関心及び広報・報道対応

今次 JDR 派遣に対するメキシコ政府・国民の関心・歓迎は大きく、また極めて好意的であった。21 日の出発から 28 日の帰国までの間、出発/到着の成田空港、メキシコ空港におけるメキシコ国民（旅行者、空港職員、航空会社関係者等）からの拍手、感謝は盛大であり、また、救助現場においても拍手、感謝に加えて、炊き出しや差し入れまで誠心誠意尽くしてくれるなど、急な派遣と過酷な作業環境になるなかでも、隊員の士気が落ちることはなかった。また、内外プレスの関心も高く、小官及び広報担当の副団長は日本及びメキシコでの出発・到着時において、丁寧に、ぶら下がり・個別取材に対応するとともに、活動期間中、在メキシコ日本大使館広報担当との連携・調整の下に、メキシコ国内の報道をフォローしつつ、大使館フェイスブックを通じて、日本チームの活動状況やメキシコ政府・国民を応援するメッセージを継続して広報した結果、数千万件という多くのアクセス数を獲得した。救助活動を終えた 25 日（月）には日墨会館において小官及び広報担当副団長が内外記者会見を行うとともに、救助犬の訓練デモンストレーションを公開するなどの広報を行った。こうした報道や広報を通じては、単に歓迎ムードのみならず、日本の救助技術に対する高い評価（例えば、メキシコ救助隊からは日本隊の技術がなければ遺体を収容できなかった等の発言）、日本隊の高い士気と規律（例えば、遺体への礼節や犬の救出にも全力を傾ける差別ない命の尊重等）に対する評価がなされるとともに、改めて日本とメキシコの友好関係の重要性に焦点が当たるなど、今後の日墨関係の発展にも良い影響を残すことができたと考えている。

この観点からも、平素より二国間の広報にあたる在外公館、JICA 事務所の広報担当官との連携が重要であることを指摘したい。

6）最後に

今回の JDR 派遣に際しては、活動期間を通じて、余震や雨による倒壊建物の構造上の悪化も懸念されるなかで、各副団長、各中隊・小隊、通信、救助犬、医療、構造評価の各班とも、互いに連携し助け合い、一丸となって職務の遂行に全力を尽くしてくれたことに心からの感謝

を申し上げたい。

同時に、かかる緊急対応へのご協力及び隊員の活動を支えていただいた警察庁、消防庁、海上保安庁、JICA の各関係省庁・機関のご支援に感謝したい。

また、特に今回、メキシコという時間的・地理的にもさまざまな制約のあるなかで、円滑な派遣・活動を成功ならしめたのは、在メキシコ日本大使館、JICA 事務所の事前の受入準備、活動中の各種支援・調整などがあったことを強調しつつ御礼申し上げるとともに、今後の JDR 派遣に際する極めて重要なプロセスとして記録し、かかる良い前例を踏襲していく工夫の必要性を強調したい。

さらに、こうした日本側努力に加え、今次メキシコでの救助活動においては、さまざまな局面・機会において、メキシコ国民による拍手・声援・感謝の言葉が 24 時間体制で活動を続ける隊員の士気を高め、勇気を与えてくれたほか、日系人社会の方々が温かく隊員の活動を支え、見守ってくれたことに改めて心からの御礼を申し上げたい。

３－２　副団長（広報・記録）

警察庁長官官房国際課　大石　光泰

はじめに、今回のメキシコでの地震災害の被災者の方々に対し、心からお悔やみとお見舞いを申し上げたい。また、JDR 救助チームのメキシコ派遣に伴い、支援をしていただいたメキシコ政府、現地の日本大使館、JICA 事務所、そして部隊拠点を提供していただいた日墨会館関係者の皆様に改めて御礼を申し上げたい。

(1) 総　括

2015 年 4 月のネパール地震以来、2 年 5 カ月ぶりの実派遣となった。今回の実派遣においては、冒頭で述べたメキシコ政府、現地の日本大使館、JICA 事務所及び日墨会館関係者の絶大なる支援を忘れてはならないが、特筆すべきは、ネパールへの実派遣以降、その反省・教訓を生かすべく、各種訓練、研修等において繰り返し議論を重ね、各種施策や試みを積極的に取り入れた結果が今回のメキシコ実派遣成功に結び付いたと考える。レスキュアーの救助技術向上は言うに及ばず、医療班、構造評価専門家の先生方との連携、年々実践的になっている総合訓練、指揮計画運用研修や指揮本部の幹部、医療班、業務調整員を対象とした、アジア・大洋州地域地震対処演習等への恒常的な参加により、チームビルディングはもとより、指揮本部の部隊指揮能力、国際調整の手腕向上も今回の実派遣を成功に導いた大きな要因といえる。

残念ながら、今回の実派遣では生存者の発見、救助には至らなかったが、統率のとれた部隊活動、メキシコのメディアから称賛された迅速かつち密な救助活動等、JDR の存在、実力を国内外に示すことができた意義ある実派遣であった。

(2) 広報対応方針

成田空港を出発する際、団長と現地等における広報対応について事前打合せを行うとともに、隊全体のブリーフィング時において、広報対応時の基本的スタンス、チーム内のルール等を明確にし全隊員に示達した。

メキシコシティ国際空港到着時をはじめ、活動現場、移動時等、JDR 救助チームはメディアや

メキシコ国民から常に注目されていたが、各隊員ともチーム方針を順守し、的確な広報対応を行うことができた。

(3) 具体的な広報対応

メキシコシティ国際空港到着時、待ち受けたメディアに対し、団長が囲み取材に対応したほか、個別の取材申し込み等においても可能な限り団長が対応した。

また、大使館等を通じての電話による取材についても、団長、副団長が直接電話で対応するなど、柔軟かつ積極的な広報対応を展開した。

(4) その他

メキシコ国内の主要メディアは、JDR の活動等全般において非常に高い関心を示し、大使館を通じて BoO（指揮本部）内での取材申し込みを要請してきたところ、団長判断により、部隊指揮に影響を及ぼさず、かつ、各メディアに対しできる限りの便宜を図れるよう、「記者会見」という形をとってメディアの要請に応えた。加えて、団長の計らいによって、記者会見のみならず、活動現場において活躍した警備（救助）犬の展示訓練を披露するなど、メディアに対し最大限の便宜供与を図った。

３－３　副団長（計画・情報分析）

総務省消防庁国民保護・防災部防災課防災情報室課長補佐　鈴木　健志

(1) 総　括

今回は INSARAG の国際救助の枠組みではなく、メキシコと日本の二国間調整に基づく救助活動であった。メキシコ政府から JDR に対して比較的早く救助サイトの指定がされたとともに、メキシコ政府職員がリエゾン役として JDR に同行したほか、日本からメキシコへの資機材の空輸が順調に実施できたため、救助サイトの選定、部隊移動及び救助活動を円滑に実施できたと考えられる。

また、先遣隊（JICA 職員 2 名）が JDR 本隊より 1 日早くメキシコに入国し情報収集やメキシコ政府との各種調整等を実施したとともに、在メキシコ日本大使館や JICA メキシコ事務所等から有用な情報提供が密にあったほか、被害が局地的で救助活動が必要な建築物の数が限定されていたことから、比較的円滑に情報分析が実施できたと認識している。

そして、日本との大きな時差、雨期のスコール、標高 2,000m 超の高地といった過酷な環境条件のなかで、安全が確保された屋内施設（日墨会館）を宿営地（BoO）として確保できたことが、今回の活動を成功に導いた最大の要因だと考える。

お世話になった在メキシコ日本大使館、JICA メキシコ事務所、日墨会館等の現地関係機関の皆様方、昼夜を問わず献身的に活動してくださった通訳の皆様方、そして、熱烈な歓迎及び応援をしてくださったメキシコ国民の皆様方に心より御礼を申し上げる。

(2) 9 月 21 日の主な活動と振り返り

1) 成田空港集結から被災国到着までの間

9 月 20 日 16 時過ぎに派遣決定の知らせを受けてから、9 月 21 日 9 時の成田空港集結までは、

荷造り、メキシコの旅行雑誌や地図の入手、Virtual OSOCC やネット記事等による情報収集を行った。成田空港で受付やメディカルチェック等を済ませたのち、中隊長・中隊長サポート・小隊長に部隊編成をするよう指示するとともに、JICA 作成の派遣ファイル及び団長や副団長（JICA）から共有された現地情報に目を通して隊員にブリーフィングする情報の頭の整理を行った。結団式直後に中隊長が隊員に部隊編成を発表したのち、飛行機に乗る前の搭乗口付近で隊員にメキシコの被災状況や到着後の活動の見込みをブリーフィングした。飛行機はチャーター便ではなく民間機 2 便に分かれて搭乗することとなったため、搭乗前に部隊編成を発表し、短時間ではあったが小隊ミーティングができたことは、チームビルディングの点で良かったと考える。飛行機内では休息をとるように心がけたが、初めての実派遣で興奮していたためか、ぐっすり仮眠をとることはできなかった。今後の活動方針のメモを作成し、着陸 2 時間前ごろには、団長・副団長・中隊長の座席を個別に回って、そのメモを基に認識合わせを行った。

2）被災国到着から宿営地到着までの間

空港到着後、メキシコ政府の施設に移動し、先遣隊として前日からメキシコに入国していた JICA 職員と合流したうえで、メキシコ政府職員との打合せを行った。メキシコ政府職員からは、被災状況のブリーフィング、JDR に活動してほしい救助サイトの指定があった。先遣隊として、副団長（消防庁）、第 1 中隊の中隊長・中隊長サポート・小隊長、構造評価専門家、医師、ハンドラー、業務調整員、通訳等が救助サイト①（ブリターニャ地域の 6 階建てマンション）に向かった。救助サイト周辺には多数の住民が救助活動を見守っていたが、倒壊マンション付近は軍や警察により規制線が張られ救助関係者以外の出入りが管理されており、救助活動に支障が出るようなことはなかった。メキシコではスペイン語が公用語で英語がほとんど通じなかったため、現場におけるメキシコ政府関係者とのやりとりは通訳またはスペイン語が話せる業務調整員を介することとなった。先遣隊が到着してから約 3 時間後、第 1 中隊の隊員と救助資機材（成田空港の後発便でメキシコ入国）が、救助サイト①に到着するのを見届けて宿営地（日墨会館）に車で移動した。

3）宿営地到着後

宿営地に到着すると、メキシコ政府から JDR に対して二つ目の救助サイトの指定があり、第 2 中隊が出動準備をしているところであった。メキシコ政府と各国救助隊の代表者会議が開催されるとの知らせがあり、団長、副団長（消防庁）、業務調整員、JICA メキシコ事務所職員でその会議に参加した。会議では、メキシコ政府から、現在救助活動が必要なサイトのブリーフィング、各国救助隊への救助サイトの指定があり、JDR に対して三つ目の救助サイトの指定があった。会議後、宿営地に戻ってからは、第 1 中隊と第 2 中隊の活動管理を行い、初日の仮眠時間は 1 時間程度だった。

（3）9 月 22 日の主な活動と振り返り

宿営地の指揮本部において、第 1 中隊と第 2 中隊の活動管理を行った。第 1 中隊、第 2 中隊ともに初日の宿営地での仮眠時間は 1 時間未満だったため、各中隊長・中隊長サポートと密に連絡をとり、隊員の疲労具合に留意するよう心がけた。夕方には救助サイト②（アルバロ・オブレゴン地域の 7 階建てオフィスビル）の活動が終了し、救助サイト③（トラルパン地域の 6 階建てマ

ンション）に二つの中隊で活動することができるようになったため、二つの中隊ともに宿営地で一定以上の休養時間を確保できるようになった。このとき、仮に救助サイト④が新たに指定されたとしても、救助活動よりもまずは隊員の休養を優先していたのではないかと考える。

（4）9 月 23 日の主な活動と振り返り

早朝、第 1 中隊に同行して救助サイト③の活動状況を確認した。救助サイト③から宿営地に戻っているときに余震があり（車中であり揺れは感じなかった）、救助サイト③にいたメキシコ政府関係者が同サイトの活動終了の判断を下し、国歌斉唱・黙祷を行ったのち、活動は打ち切りとなった（JDR は宿営地に引き上げた）。その後、お昼のメキシコ政府と各国救助隊の代表者会議において、救助サイト③については、各国の構造評価専門家が建物の危険性を調べたうえで、関係国で協議をして救助活動を再開するかどうかを判断することとなった。そこで、構造評価専門家、副団長（消防庁）、中隊長、業務調整員等で指定された時間に救助サイト③に行くと、既にメキシコの救助部隊と他国の救助隊による救助活動が再開されていた。メキシコ政府の上層部とメキシコの救助部隊の現場責任者との連携がとれておらず、現場責任者の判断で建物の危険性評価をして活動を再開していた模様だった。その後、現場での約 3 時間にわたる関係者協議の結果、JDR が今まで活動していた場所で、JDR 自身で建物の危険性を評価しながら可能な範囲での救助活動を再開することとなった。日本とは文化や考え方の異なる複数の国との活動調整の難しさを肌で感じた一幕だった。指揮本部、中隊長、業務調整員のなかで、このような多国間の調整にたけた人材をより多く育成しておく必要があると感じた。

（5）9 月 24 日の主な活動と振り返り

宿営地の指揮本部において、第 1 中隊と第 2 中隊の活動管理を行った。お昼のメキシコ政府及び各国救助隊との定例会議において、メキシコ政府から、現在各国が活動している救助サイトでの活動が終了すれば、ほかに活動をお願いする所はない旨のアナウンスがあった。各国の救助チームの撤収見込みを考慮しつつ、JDR としての救助活動終了のイメージを描きながら、中隊長・中隊長サポートと密に連携をして活動管理を行った。夕方、救助サイト③でマンションの住民の飼い犬 1 頭を生存状態で救出して飼い主に引き渡した。その後の検索の結果、瓦礫内で生体反応は特段確認されなかったため、救助サイト③の活動を終了することとし、JDR としての救助活動は完了した。

３－４　副団長（安全管理）

海上保安庁警備救難部救難課　中末　陽介

安全管理担当副団長として、

（1）派遣前の情報収集及び注意事項
（2）被災国到着時情報収集及び注意事項
（3）BoO における注意事項
（4）活動サイトにおける安全管理に関する事項
（5）所　見

を次のとおりまとめる。

(1) 派遣前情報収集及び注意事項

1) 派遣決定後の情報収集

外務省海外安全ホームページ､インターネット等を利用して安全情報を収集するとともに外務省から提供された資料、報道等により被災状況、治安情報・余震発生情報等の情報収集を実施した。

a) 治安情報

- メキシコでは殺人・誘拐・強盗等の凶悪犯罪が多発
- 多くの犯罪は当局に通報されていないとみられており、メキシコ当局が発表した犯罪統計は、実態の一部しか反映していない。
- 全土で組織的犯罪として誘拐が横行
- 麻薬組織間の抗争や、組織内部の抗争が頻繁
- 2016 年 4 月には、主要ホテル地区内で襲撃者と当局間で数時間にわたる銃撃戦が発生
- 日本人が被害者となる強窃盗事件が引き続き発生

b) 交通事情

- 車優先社会であり、日本のように歩行者は保護されていない。
- スピードを出し運転は荒い。

c) 風俗、習慣

- カトリック教徒が多くを占め、宗教上の特別な注意事項はない。

d) 衛生事情

- 特別に注意を要することはないが、生水は飲まずミネラルウォーター等を利用すること

e) 建物・余震発生状況

- 詳細な情報は発見できなかったが、大きな余震が起こっているという情報には接しなかった。

2) 隊員への注意事項

風俗、習慣、衛生状況については特段注意を要するものはないことから一般的な注意事項にとどめることとした。

また、収集した治安情報では極めて危険であるとのことであったが、個人旅行者、ビジネスでの旅行者とは異なり、国際緊急援助隊員として団体で行動すること、現地の雰囲気が不明であるなか、必要以上に不安をあおることがないよう活動現場での注意事項は現地到着後、現地関係者等から情報収集したのちに周知することとし、まずは、空港から BoO 到着までの注意事項を周知することとした。

さらに、隊員それぞれが現地活動での緊張、不安を抱えるなか、外国出張に不慣れな隊員が

手続き面における不要な不安を抱いていたことから、セキュリティーチェック⇒出国審査⇒到着後の入国審査⇒荷物受取り⇒税関手続きの一連の流れの説明を行ったのち、それぞれの場面で注意すべき点及び以下 3 点を周知した。

- 各種手続きに不安がある場合は、遠慮せず相談すること
- 窃盗が多いことから、荷物から目を離さないようにすること、トイレ、喫煙等に行く場合は、荷物番を依頼すること
- バディーを組んで単独行動を避けること

(2) 現地到着後の情報収集及び注意事項

1) 現地到着後、現地 JICA 等からの情報収集

- 被災状況は、メキシコ市シティー内の 38 の古いビルが倒壊したが、その他の被害はない。電気、水道、ガス等のインフラに問題はなく、通常の経済活動が行われている。
- 被災現場は、警察等の治安機関が警備している。
- 規制線が被災現場直近に引かれており、住民が集まっている。

との情報を得た。

2) 隊員への注意事項

着陸前の航空機から確認した状況、空港から BoO 到着までの移動中確認した状況及び上記情報を踏まえ、以下の注意事項を周知した。

- 現場は警察等が警備しており、治安は保たれている。
- 一方、警察等は自動小銃を所持し警備にあたっているが、そういう国である。

また、規制線が被災現場直近に引かれており住民が集まっているとの情報があり、住民とのトラブルも想定されたことから、

- 救助活動に対するクレーム等があった場合は指揮部に速報すること
- 現場で対応しなければならない場合でも複数で対応すること
- 自分たちは正当な活動を行っているという自信をもって対応すること
- 言語による壁を感じる必要はなく、通訳がいなければ日本語で話せば事足りること

以上、4 点を周知した。

(3) BoO における注意事項

通常、救助チームは野営（テント）を原則としているが、今回は現地 JICA 事務所、社団法人日墨協会（La Asociación México Japonesa）のご支援により到着時には日墨協会が所有する会館（以下、「会館」という）を BoO として確保されていた。

会館に到着後、構造評価専門家によるチェックを受けたところ、構造上の問題がないことが確認された。また、

- 活動サイトへのアクセスも容易である。
- 駐車場、中庭が大きく、余震があった場合でも十分な避難スペースを確保できる。
- 入口にゲートがあって警備員が常駐しており、治安上の心配がない。
- 屋内にトイレ、資機材保管スペースがある。

など、通常であれば考慮しなければならない、さくはあるか（治安面）？　二次災害（土砂崩

れ、浸水等）はないか？　盗難防止対策、危険物の隔離、生活区画、汚染区画の分離等を検討する必要がない申し分のない環境であったことから、余震で建物が倒壊するおそれがある場合の

・　第一避難場所を駐車場
・　第二避難場所を中庭

とする 2 点のみ周知事項とした。

(4) 活動サイトにおける安全管理に関する事項

帰国後、隊員からの聞き取りを行ったところ安全管理に関する以下の意見が出された。

1）情報共有関係

・　中隊長、中サポ及び両小隊長が ASR2 のため不在となり、情報共有がないまま隊員は車内で長時間待機せざるを得ない場面があった。
・　ワークサイトトリアージフォーム等の情報共有がなされない場面があった。
・　指揮所に設置されたホワイトボードに情報が集約されていなかったことから中隊・小隊間の引き継ぎに時間を要し、また、現場に入ってから状況を把握するような活動が続いた。
・　退避場所について、明確な周知がなされておらず、倒壊の延長線上及び倒壊のおそれがある建物間の路地へ退避した者があった。

2）活動関係

・　サーチングホールによる確認をせずにブリーチングを開始した場面があった。方針に疑問を感じたにもかかわらず指摘できなかった。
・　倒壊した建物の傾斜側に指揮所を設定したにもかかわらず安全距離を設けていなかった。また一度余震により活動を中断したにもかかわらず、再開後に同場所に指揮所を再設定した。
・　他国が設定したブリッジラインによるライフラインの支点確認または再設定の不実施等、安全管理が徹底されていなかった。

3）部隊の運用関係

・　移動時間が予想外にかかったこと、活動開始時の全体活動からローテーションへの切り替えがスムーズにいかなかったことから当初 2 日間、BoO での休憩時間をほとんど確保できなかった。

4）荷物の管理について

・　「窃盗には注意すること」と注意を受けていたにもかかわらず、作業効率を優先し、現地のドライバーのみが残る車内に荷物を放置して活動する場面があった。
・　活動中常に携行していたはずのウエストポーチについても、作業後半になるにつれテント内等に放置し活動する場面があった。

5）機材の活用について

・　区画進入の隊員が撮影するカメラと破口で待機する指揮者が持つタブレット間で Bluetooth を用いた映像の共有を実施したところ、有効に活用でき安全管理に役立った。

(5) 所　感

1）治安関係

BoO について、日墨協会のご厚意により会館を使用できることとなり、安全が確保された。

また、事前に収集した治安情報では窃盗等の犯罪に注意を要すると考えていたが、救助現場は多数の警察官等により警備がなされており安全が確保されていた。

さらに、心配された住民とのトラブルに関してもメキシコは極めて親日的な国で市民も JDR の活動を熱烈に歓迎しており杞憂に終わるなど、一連の活動において治安面の不安を感じることはなかった。

2）活動サイトにおける安全管理

活動中の安全管理について、隊員に注意を促すことも重要であるが、疲労が蓄積するなか、現場において注意力が低下することはやむを得ないことであり、現場用のチェックリストの充実、作業前のブリーフィングの充実等、チームとしての安全管理体制の強化を図る必要がある。

また、指揮所の設置場所や作業について危険を認知した隊員がいたが、言えなかったまたは採用されない場合があったとのことである。

少人数で危険な作業に従事する場合、安全管理上、意思疎通を図り、作業手順及び指揮部または中隊長等がどのような方針をとっているか等の共通認識をもつことが重要であり、隊員間の円滑なコミュニケーションが確保できる体制づくりを検討する必要がある。

加えて、指揮部においても方針を明確に隊員に伝達するとともに積極的に隊員から危険情報を収集し、安全管理に反映させる必要があったことから、反省点として記録する。

３－５　副団長（連絡調整ロジ）

JICA 国際緊急援助隊事務局緊急援助第二課　山根　誠

(1) フライトの選択

9 月 20 日の手続き開始当初、同日夕方の直行便にて直ちに 2 名の事務局員を先遣調査チームとして派遣、本隊派遣はチャーター便の手配を検討したが、メキシコシティは東京から 1 万 1,000km 以上あることに加え標高 2,200m の高地であり特別仕様のエンジンが必要とされ対応機種が限られることもあり、ANA、JAL ともに余剰航空機の手配が困難であることが判明、商用定期便を選択した。商用定期便の選定に際し、人と機材を同着させる必要があるため、米国経由は ESTA（電子渡航認証システム）の取得に加え、いったん入国することによる救助犬の取り扱い（米国内での検疫手続き）及び経由地での危険品を含む航空貨物の確実な転送が懸念されたため、これを断念し、翌 21 日離陸予定のメキシコ直行便を選択した。

メキシコへの直行便は手配可能座席数の制約により、アエロメヒコ（AM）便及び ANA 便の 2 便での分割輸送を選択し、現地到着後の迅速な活動展開を可能とすべく、先着する AM 便に幹部（団長、副団長、中隊長、小隊長、チーフハンドラー、メディカルマネジャー、構造評価専門

家）及び救助犬を搭乗させることとした。救助犬は受託手荷物として搭載したため、成田での搭乗及び現地での引き取りは迅速かつスムーズに実施できたが、ケージを含めた重量は 45kg の制限があるため、警備犬訓練所の協力を得てケージから部品の一部を取り除き軽量化を実施した。

（2）資機材輸送

メキシコシティまでの国際航空貨物輸送は AM 便及び ANA 便ともに、航空危険物の搭載がメキシコ当局より認可されていなかったため、外務省経由での先方政府からの認可取得交渉を経て最終的に搭載が可能となった。また、地震発生に伴う代替着陸（ダイバート）空港の設定が離陸直前まで決まらず、同結果しだいでは燃料搭載量との相殺により貨物搭載可能量が 4t から 10t の間で変動する可能性があった。このため、いずれのフライトにどれだけの資機材分を搭載するかについて、輸送業者と航空会社間を含めて綿密な調整が必要となったが、ネパール派遣後の教訓として準備してきた八つの資機材区分化に基づき、スムーズかつ着実な資機材分割輸送を実施できたことは大きな成果である。同様の改善策として、各梱包に区分番号を張り付けたことで、BoO での効率的な資機材搬入/搬出が可能になったほか、資機材輸送業者からは搭載時の取り回しが極めて効率的であったとの意見も寄せられている。

メキシコシティ到着後の隊員及び資機材輸送は、JICA 事務所による必要十分な車両手配と先遣派遣された事務局員（業調）による運用手配により、大きな問題なく実施された。本チーム受入れに係る車両、通訳、燃料等の膨大な現地手配に際しては、日系コミュニティから手厚いご支援を頂いたほか、ANA 社にはフライトの貨物搭載スペース確保に多大な調整尽力を割いていただき、現地 ISUZU や日野自動車からは無償でトラックを提供頂くなど日本企業も含めたオールジャパンによる大きな支援を頂いたことに感謝申し上げる。

（3）BoO の運営

本隊到着直後に構造評価専門家による日墨会館の構造診断を実施、余震リスクに対する安全性を確認したうえで BoO を設営した。同会館の利用は、到着後の迅速な捜索救助活動開始に貢献しただけでなく、到着直後より昼夜を問わず連続した活動が求められ、活動期間を通じて冷たい雨が降りしきる状況にあって、電気、通信、セキュリティ、生活環境等の面で野営に比べて利点が大きく、身体的・精神的な負担を抑えることができた点は隊にとって有益であった。

今次派遣にはスペイン語人材 2 名を含む 9 名の業務調整員が派遣され、活動現場には、広報担当を兼ねて可能な限り業務調整員が部隊に帯同した。活動現場では常にメキシコ側救援勢力との協働体制となったため、メキシコ側関係者との連絡調整や通訳要員の活動管理、現地報道関係者との取材対応調整、広報用写真と動画の記録など、業務調整員帯同による成果は大きかったものと考える。一方で、業務調整員の平均睡眠時間は 1 日当たり 3〜4 時間に満たない連日の激務となったが、仮に野営の場合や業務調整員が標準編成の 7 名でであった場合は他業務との兼ね合いから、現場に帯同するロジ要員の捻出は極めて困難と懸念される。派遣時の状況に応じ、所掌業務にこだわることなくレスキュー隊員の協力（食事準備や写真記録等）を得ることも必要である。

（4）物資補給・通訳等

水、燃料、潤滑油、材木、携帯電話、Wi-Fi 装置など USAR（都市型捜索救助隊）活動に必要な物品は、日系コミュニティの多大な支援もあって、チーム本隊到着時に JICA 事務所により十

分量が調達済みであった。同様に計 12 名の日墨通訳を確保できたため、2 現場での昼夜連続の活動において必要な人員を活動支援に充てることが可能となった。活動現場では常時メキシコ側の救援勢力や政府コーディネーターとの連絡が必要となったため、日本語の堪能な通訳を複数確保できたことは極めて有用であった。食事については現地調達が可能であったが、活動現場での利便性を重視してレスキューフーズを活用し、活動期間の延長に備え本邦から必要量（3 日分程度）の追加輸送を実施するなど、自己完結した補給体制確保に努めた。

（5）結団式・解団式

結団式及び解団式を実施した成田空港第1ターミナルの有料会議室は第2ターミナルに比べて手狭であったため、メディカルチェック、PPE（個人用防護具）配布と着替え、個人手荷物整理、幹部ミーティング開催に少なからず混乱を招くこととなった。今後の改善策として、集合時間の前倒し、受付カウンターの設置と幹部を優先した段階入場制、同様の制約下での総合訓練実施等の対応を検討したい。

（6）連絡調整

1）LEMA 及び OSOCC（UCC）

今回のメキシコ地震被害に対して、日本を含む 9 カ国（米国、スペイン、イスラエル、ホンジュラス、パナマ、コロンビア、エクアドル、エルサルバドル）の国際チームが派遣された。日本は二国間要請に基づく派遣となったが、メキシコ政府は受入国を限定的に選択し、同政府主導の調整枠組みに組み込まれる形となったため、INSARAG 手法に基づく調整（RDC 設置、UCC 設置、各種様式の提出等）は行われなかった。

現地災害対策本部（LEMA）は市内中心部の連邦政府施設に設置。市民保護局を中心に、連邦政府及び市政府当局、軍関係者、連邦警察等により構成され、活動期間中は朝と夜に定例の調整会議が開催された。JDR チームは到着初日の 21 日 14 時 30 分に最初の LEMA 協議を実施、市内 38 カ所のビル倒壊現場の一つをタスキングされ、同サイトを対象に先遣隊を派遣することを決定した。翌日からは定例会議出席に加え、LEMA へのリエゾン常駐を求められたため、JICA メキシコ事務所の協力を得て同所員をリエゾン要員として配置することで LEMA との連携体制を確保した。

2）大使館、JICA 事務所及び JDR 事務局

在メキシコ日本大使館からは、館員が常時、隊に同行し、LEMA との協議時に通訳として活躍しただけでなく、外務省及び大使館との円滑な連絡調整にも大きく貢献頂いた。また、JICA 事務所は小規模事務所でありながら、極めて短時間のうちに膨大な現地調達や政府間調整業務が殺到し多忙を極める状況であったが、ホンジュラス、エルサルバドル、ボリビアの各 JICA 事務所からの支援要員派遣もあり、隊との連絡調整に支障を来すことはなかった。

JDR 事務局との連絡においては、事務局の夜間バックアップ体制が構築されたため、連絡自体に支障はなかったが、業務調整員の勤務シフトと担当業務を本部に明確に通知することで一層の効率的な連絡体制強化が図れるものと考える。また、今後の課題として、本邦向け広報情報としての撮影動画や写真の公開可否判断に時間を要するケースがみられたことから、チーム内で可否判断をするとともに、即時に本部に共有し広報資料として活用できるよう体制改善を

進めていく予定である。

３－６　メディカルマネジャー

地方独立行政法人山梨県立病院機構山梨県立中央病院　井上　潤一

今回の派遣は標高 2,200m を超える高地での活動による潜在的な身体負荷があるなか、2 日間にわたり 2 サイト並行で救助活動が展開され、かつ倒壊危険性が極めて高い状況下で生存反応がある要救助者への救助活動が求められるなど、隊並びに隊員に対する物理的・身体的かつ精神的にも負荷の高い活動であった。

これに対し医療班では、隊員に対する水分の積極的補給など継続的な注意喚起を行うとともに本部に対する活動体制への医学的見地からの助言などを行い、隊員の健康状態を維持し隊として最大限の力を発揮できるようサポートした。特に現場活動に関しては、今回の倒壊現場が進入隊員すら 2 次崩落の恐怖を感じるような非常に苛酷な状況であったことに加え、現場全体の統制が全くとられておらず各所で勝手に救助活動が行われるという非常に危険な状況であった。そのため現場に 2 名体制で医療班員を常駐させ、万一の場合に備えた現場での応急処置体制や、現地医療チームとの協議による要救助者救出時及び隊員負傷時の医療対応ルートの設定など万全の体制をとった。

今回の被害地域は限局的であったため、BoO としてライフラインが完備した安全かつ快適な環境の既存施設（日墨会館）が利用できたことは、隊の運営面での利点のみならず隊員の負荷軽減においても非常に大きかった。

診療は 23 名（隊員 22 名、現地関係者 1 名）に行い、内因性 14 例、外因性 9 例であった。

医療班隊員は 5 名中 3 名が初派遣であったが、全員で協力して無事任務を全うすることができた。このことはこれまで医療班が行ってきた研修や訓練が実派遣に十分対応していることの証左でもあり、今後も改良を重ねながら継続していくことが重要である。一方今回現場支援に比重を置かざるを得なかったことから BoO での活動に十分な時間がとれなかったが、業務調整員の方々により食事準備や除染エリアの設営をはじめとした手厚いロジスティクスサポートを得たことで支障なく対応することができた。

今回の派遣では救急救命士の有資格者が 3 名含まれていたため、救助活動や健康管理において小隊レベルから効果的な連携が可能であった。将来的にもこの体制の継続をお願いしたい。

今後の課題として、医療班が 2 陣に分かれて出国する際の対応、資機材医薬品の効率的な管理、高度倒壊リスク下での CSM（閉鎖空間における医療活動）対応、医療班の情報通信のあり方、現地スタッフのストレスマネジメントを含む健康管理、等について検討が必要である。特に CSM については 2 次倒壊のリスクが高いなかでは、“点”での介入を一層洗練させるとともに救急救命士と一体となった活動をさらに進める必要がある。また今回生存救出が想定されたことから現場と本部・メディカルマネジャー（MM）の通信量が増大したが、必要な通信量に比し情報通信ルートが不足し医療班内でのメール等で対応した。画像伝送やセキュリティを確保したうえでの SNS の利用など検討すべきと思われる。現地スタッフの健康管理に関しては今回急性ストレス反応で業務続行困難となった事例が発生しており、災害現場経験のないスタッフが最前線の苛酷な状況に長時間立ち会わざるを得ない状況に対し、労務管理を含めた対策が必要である。

今回救助チーム医療班自ら、その意義を改めて認識するとともに、どのような状況であっても確実にチームをサポートできなければならないと痛感した。チームから信頼される医療班であり続けるよ

う、今後とも研鑽を積んでいきたい。

終わりに、団長以下すべての隊員並びに事務局はじめ支援頂いたすべての関係される方々に対し、医療班一同より深く御礼申し上げます。

〈本派遣に基づく提言要旨〉

	隊全体	医療班
出国まで	・参集と準備を効率的に行うためのスペースを確保する。準備と結団式の場所は分けることも考慮する。 ・中隊を構成する際、輸液対応可能な救急救命士は均等に配置する。 ・2 便に分かれる場合、可能なら医療班は 2 名/3 名の組み合わせが望ましい。	・メディカルチェック時の血圧測定は、40 歳以上かつ、降圧薬内服または高血圧の既往者とする。 ・MM 以外の 4 名の班員のなかにリーダー役を置き、指揮命令系統を明確にする。 ・2 便に分かれる場合の対応を確立する：人員、薬品、初期活動方針
BoO	・設営に際しプライバシー確保や衛生を考慮する。 ・業務調整と医療班で定期的にミーティングをもち意思疎通と課題の共有を図る。	
現場活動		・高度倒壊リスク下での CSM について改めて実施できるのか検討し、訓練に反映させる。 ・休憩時の寒冷対策を講じる。 ・医療班員も現場で休息することを考慮する。
健康管理	・連続活動時間の上限とその後の最低休息時間に関する目安を検討する。 ・症状の申告や受診、治療はチームの機能維持、危機管理に不可欠なものであること、本人の不利益にならないことを研修会や訓練を通じて徹底する。	
資機材 薬剤		・薬剤管理体制を見直す：cold chain、ケタミン管理、帰国時廃棄要否 ・生活資機材（Y セット）の内容を把握しておく。 ・メンテナンス会への参加を派遣基準に含める。
MM		・対策会議、UCC 会議に参加し状況を把握する。 ・CSM の実施にあたっては可能な限り現場を確認したうえで判断する。 ・隊員負傷時の対応チャートを作成する（あらかじめフォーマット化したものを持参）。
その他	・情報通信を強化する：画像伝送を確立し、SNS 利用の可能性を検討する。 ・現地スタッフのストレスマネジメントを含む健康管理と労務管理のあり方を検討す	

	る。 ・今回 BoO としてライフラインが完備した日墨会館を利用できたことは格段のアドバンテージとなったが、今後も基本は野外テント泊であることを前提に訓練や資機材整備を行う。
総合訓練で行うべき想定	・現場レベルでの医療調整：被災国救助チーム・医療チーム、他国救助チームと要救助者救出時にどのように対応するか、あらかじめ調整しておくことを理解する。 ・隊員の負傷：現場中隊、医療班、本部、それぞれがとるべき行動を確認する。

３－７　中隊長

３－７－１　第 1 中隊

東京消防庁　木下　修

(1) 派遣に際して

私は本派遣において、結団時の全体ブリーフィングにおける団長指示にもあった、①チームビルディング、②安全管理、③日本らしさ、の 3 点を念頭に一連の活動にあたった。

日本出発に際しては、隊員個々の高い志と事務局の支援が心強かったが、チームが 2 便に分かれての移動となり、中・小隊間のコミュニケーション不足のまま現地入りしたことに不安を感じていた。

(2) 捜索救助活動について

1) ブリターニャ

第 1 便がメキシコシティに到着、最初の活動サイトが決定し、1 中隊の先遣隊はブリターニャ地区の 6 階建てマンション倒壊現場に先行した。パンケーキクラッシュ状態の現場は、崩れる際に 19 歳の女性が逃げ遅れるのが目撃されており、多くの現地救助隊とボランティアが発災から丸 2 日間、手掘りとバケツリレーで懸命な捜索作業を続けていた。

情報収集と活動調整ののち、日本チームの活動方針を決定し、途中激しいスコールにも見舞われたが、第 2 便で現地入りした隊員と資機材の到着後は本格的なブリーチングに移行し女性を発見、生体反応はなかったものの丁寧な救出に心がけ、きれいな身体のまま見守っていたご家族に引き渡すことができた。

2) トラルパン

1 中隊はブリターニャでの活動を終了し BoO に移動、指揮本部への活動報告と資機材整備を終えて休息に入った直後、新たな情報により 2 中隊が活動中のオブレゴンに続く 3 番目のサイト、トラルパンへの出動が決定した。

到着したトラルパンの現場は、6 階建てのマンションが 1 階を残して各階層とも数十センチのすき間を残しパンケーキ状につぶされた状態であったが、活動中の現地救助隊が建物中央 3 階部分からうめき声と壁を擦る音を確認しているとの情報を得た。

1 中隊は構造評価とドッグサーチののち、再びサイレントタイムを設定し、集音マイクのヘッドホンを通じて中サポ自身も摩擦音を確認したため生存者の可能性が大と判断、活動方針を、正面からのビデオスコープによる捜索と、屋上進入口から掘り進むという 2 面対応と

した。このときが、発災から 70 時間後であった。

当然、現場は建物状況からも危険を伴う活動となるため、構造評価専門家の意見や亀裂を監視するマーキング、赤外線レーザーによる監視、緊急時の護身対応など、最大限、安全管理に配意した活動とした。また、この現場はオブレゴンの現場を終えた 2 中隊との 8 時間ごとのローテーションによる活動となったため、活動図面などを活用して申し送りを徹底した。

そして、3 階内部での補強材を設定しながら掘り進むという、危険を伴う地道な活動を継続した結果、発災から 5 日目に生存していた飼い犬を発見、交代した 2 中隊により救出し、飼い主に引き渡した。

(3) 終わりに

派遣を終え、3 点を振り返る。

1) チームビルディング

今回 1 中隊（1・2 小隊）は、成田出発ロビーでの分割後、ブリターニャでの救助活動進行中に第 2 陣が合流し、チームビルディングと共有情報が不足するまま活動に加わったが、隊員個々のスキルでそれを克服し任務を完遂できた。早期の被災国派遣のためには分割移動も十分考えられることから、あらゆる場面を想定した訓練、準備が必要である。

2) 安全管理

安全に絶対はないが、隊員が無事でこそ被災者を救出できる。CSR（狭あい空間における救助活動）の実施に際しては、現場の安全性や困難性、構造評価専門家の意見、活用資機材や隊員のスキルなどを総合的に判断して決断することとなるが、中隊構成員全員での目的の共有と意思の疎通が不可欠である。

3) 日本人らしさ

メキシコでの活動においては、親日的な国柄や日墨会館での宿営などにも恵まれたが、活動サイトに帯同した業務調整員や通訳の力を借りて、他国や現地救助隊との相互理解の下、先進的かつ規律と優しさをもった日本チームらしい捜索救助活動を全うできた。これは、隊員一人ひとりの日本国代表としての矜持の表れと確信する。

３－７－２　第 2 中隊

警視庁

(1) チームビルディング

団長、副団長とは、2017 年に行われた指揮運用研修等で顔を合わせていたので、指揮本部との調整や任務割り、活動方針等の検討などは、意見を交わしやすかった。

また、中隊内では、2015 年 3 月に IER（INSARAG 外部再評価）を受検した隊員や、技術訓練、総合訓練等に参加している隊員も多く、小隊長を中心としたチームビルディングもスムーズに行えたことから、現地入りしてからすぐに捜索救助活動に移行することができた。

（2）BoO と通訳

在メキシコ日本大使館や現地の JICA 事務所、日系人の方の協力もあり、日墨会館を拠点にできたことや現地の日本語学校の卒業生などが通訳をしてくれたことにより、JDR 救助チームは捜索救助活動に専念することができた。

（3）活動サイト

JDR 救助チームが現地入りしたときには、メキシコ政府で被災状況等を把握していたため、メキシコ政府の要請に基づき、捜索救助活動を実施し、活動現場は、いずれも 6 階建てマンションや商業施設で、地震によりパンケーキクラッシュ状態に倒壊した場所であった。

（4）捜索救助活動

日本でもパンケーキクラッシュの被災現場を想定した訓練を実施していたため、活動の手順等は隊員たちも熟知していたが、実際に崩落したコンクリートを砕き、中を捜索するにあたっては、訓練では経験できない危険性や恐怖感を肌で感じることとなり、構造物評価員による評価や建物の継続的な測量など、安全管理には細心の注意を払いながら活動した。

地震発生から約 5 日後に発見した飼い犬の救助については、JDR 救助犬によるドックサーチで何らかの反応を示した場所を掘り進んで捜索した結果、発見したものであり、JDR 救助チームとして何とか飼い主の元に帰してあげたいという思いと JDR 救助チームのもつ知識・技能、安全対策等の高い能力があったからこそ救助することができたものである。

また、救助活動中は、現地の救助チームやボランティアチームのほか、イスラエルや米国の救助チームと同じ現場で活動することになったが、メキシコ政府の協力もあり、JDR 救助チームとしての活動をすることができた。

（5）派遣を終えて

今回の派遣は、メキシコ政府だけでなく、メキシコ市民や日系人の方たちの協力があったこと、団長をはじめとしてそれぞれの立場の方々が日本の代表として任務を全うしたことが、JDR 救助チームとしての成果につながったと感じている。

３－８　チーフハンドラー

警視庁

（1）派遣前

- 犬の渡航手続きに思ったよりも時間がかかることが分かった（書面の照らし合わせ等）。もう少し全体の集合時間よりも早めるか、もしくは別の者（送りの人員）に頼むか対策を立てないと、個人荷物の受領から資材整理、メディカルチェックなど、結団式までの時間的な余裕がなかった。
- 出発する前にチームビルディングをするタイミングで各中隊にあいさつ・顔合わせをすることができたが、名前と顔が一致しない初対面でも簡単に判別ができるように、所属と名前をテープで貼るだけでなく、腕章のような物で色分けをして自分の小隊なり役割が一目で分かるようにするとよい、などの意見もあった（医療班は赤のビブス、構造評価は緑のビブス、

業調は青のビブスと一目で分かるが、各小隊やハンドラーは明確には判別が難しい）。

(2) 現場での活動時

- 第 1 現場へ臨場する際に、副団長、1 中サポート、①②小隊長、構造評価、ハンドラー、通訳の 11 名で現場へ向かった。既にメキシコチームがアタックしていたこともあり、ASR2 終了後にすぐにドッグサーチを行った。2 頭が同一箇所で反応を示したが日本チームは活動部隊も RC 資機材もなく、その場を担当していたメキシコチームがドッグサーチの結果を踏まえて活動を進めていったところ、行方不明者と思われる女性を発見した。

  当初から ASR2 後に BoO に戻らずに、すぐにサーチ活動を行う予定があるのならば、K9（警察犬）だけでなくテクニカルサーチ資機材とともに 1 個小隊は帯同していくべきであった。
- ハンドラーがホットゾーンに入るときは安全管理員を必ず付けて、必要なところはサポートしてもらう。

  総合訓練や技術訓練等で K9 への理解力が広まってきている。今回もドッグサーチの活動をする際の効果と注意事項を中隊員に対して事前に説明し、理解してもらっていたので、現場での意見交換やサーチのタイミングがスムーズであり、部隊との連携もよくとれていた。
- ドッグサーチは生存者に対して反応あり、なし、で判断することが基本だが、今回のようなパンケーキクラッシュのような建物では人が生存していそうな場所を検討づけるためにも、臭いを頼りにして犬がどこにどのような状況で反応しているのか、担当者でなくては判断がつかないようなことでも、その後のテクニカルサーチとの併用のため、助言が欲しいとの部隊長からの要請もあった。
- 高所での作業は移動手段として、ハンドラーが犬を背負う場面があったが、はしごを登る際に最低限の自己確保として、スリングやハーネスを携行しておけば安全確保がより容易にできると感じた（スリング、チェストハーネスは中隊資材として BoO の資材置き場に置いてあった。今後、資機材担当の部隊員に申し出て必要なときに使えるよう一時的に借用するのもありとの確認がとれた）。

(3) 犬の管理面

- メキシコまでの飛行機での長時間の移動によるストレスがどこまで犬の体調に影響していたかは分からないが、便意以外は特に問題はなかったように思う（約 14 時間＋空港での待機時間 6 時間）。
- 今回は犬専用の車両とドライバーが手配されていたので、現場に着いても活動時以外は車両内で管理することができた。
- BoO においても周りを壁で囲まれていて野犬なども立ち入ってこず、雨風がしのげる場所であったので管理はしやすかった。
- 体調管理面でもトラブルはなく、餌も計画的に適宜適量を食べさせるように努めた。飲み水も水道水や雨水は飲ませないように気をつけ、ミネラルウォーターを常に与えたため、便が緩くなることはなかった。
- 標高が 2,000m を超える場所での活動となったが、犬はいつもどおり活発に作業を実施していた。

(4) その他

- 小型カメラを犬に装着させ、穴に犬を進入させることは可能か、との質問があった。現在、装備開発中であり、実用化まで時間は要するも実現可能である。しかしながら、閉所において犬にカメラを装着して進入させることは、進入内部において引っかかり、身動きがとれなくなるというデメリットも含んでいる。
- すべての移動においてハンドラー専用車を用意していただき、さまざまな状況において臨機応変に対応することができ非常によかった。
- 帰国後、検疫、個人装備返却、解団式までも慌ただしく、犬も落ち着きのない状態のまま解団式に同席させる結果となった。

３－９　構造評価

（株）構造コンサル東日本　高橋　勇
（株）アルテック　小倉　隆

構造評価専門家（SE）として、派遣決定に際し実施した事項をまとめる。

(1) 派遣決定時の情報収集

派遣決定後メキシコの建物の概要、報道での被害状況をインターネット等で収集し安定処置の方法等を概略検討した。また、余震発生状況の情報を収集し救助計画の参考にした。

BoO として使用する建物の使用判定には、日本の応急危険度判定のマニュアルを参考とすることで対応した。

1）建物概要

32 年前の地震により耐震基準が見直され、かなり日本に近い構造物が報告されている。しかし、メキシコもラテン系の国柄、既存不適格建物（旧基準での建物）がまだ残っていることが報告されている。

RC 造の柱・梁・床で壁がれんが造（柱・梁は細く小さい）の建物が多い。

被害建物の情報は、インパクトのある映像が報道されていて、崩れた建物の上に多くの救助関係者や一般の人が乗っていることが確認された。ただ、報道されている建物は少数であり、全体の把握ができない状況であった。

メキシコシティで 38 棟（把握できず）だけとの状況でもあった。

2）余震発生状況

日本での情報は、あまり報道されていないため、分からずじまいで出発となった。

(2) 派遣出発前の情報共有

前述の収集情報を、成田空港出発前の指揮本部ミーティングにおいて、注意事項の共有を行った。余震に対する情報は現地 JICA 事務所の協力で収集依頼を願った。

(3) 現地到着時の情報把握

メキシコシティ空港到着時から BoO までのバス移動時に、車窓よりの被害状況の把握に努めたが、被災建物を発見することができずじまいであった。事前情報での 38 棟被災ということが現実として把握できた。

建物の構造概要としては、低層の建物は細い柱・薄い梁にれんが造の壁がまだまだ大勢であること、中層から高層の建物は日本と変わりない断面の柱、梁も大きい。

被災を受けた建物は、32 年前の地震を経験していた建物で、平面特徴と震源との関係による地震力の方向性で被災が免れたが、前のダメージに加え今回の揺れで崩壊してしまったと考えられる。

崩壊形状は、パンケーキ状崩壊であり、報道写真での状況が目の前に出現した。このような崩壊は、床との空間がほとんどないことが考えられ、よって救助にはどの建物も困難が予想される。安定化処置は現地の大工さんがボランティアで従事し、ポストショア、レイカーショア等が設置されている状況だ。ただ、ポストにおいては木材の長さが足りず、角材を継いで使用し、継ぎ方に不安が残る箇所も見受けられる。レーカーはフライングレーカーがほとんどであり、ポストと同様に座屈長さが長い。許容耐力が低くなる不安はあるが、本数を稼げば問題ないと判断した。

(4) BoO として使用する建物の構造評価

メキシコシティ到着後、現地 JICA 事務所より、派遣中の指揮本部・宿泊場所・資材置き場等として、日墨会館の使用ができるとの連絡があった。日墨会館はメキシコ在住の日系人のメキシコとの友好のため、先人たちが建設した建物とのこと。地上 3 階、RC 造の建物であり、1 階は壁が多く倉庫やミーティングルームがあり、2 階は事務所・日本レストランが入り、3 階は大広間で舞台も併設されている。

日墨会館到着後、構造評価専門家 1 名と安全管理担当副団長の 2 名で、同会館の構造評価を実施した。外観検査・内部調査を実施し、構造評価は日本の地震時に実施している建物評価方法の一つの「被災建物の応急危険度判定」RC 造編を適用した。

構造評価の結果、BoO 場所として、また宿泊地としてなんら支障ないことを確認し、指揮本部会議に報告し派遣期間中の宿泊地兼 BoO として選定した。日墨会館にも結果を伝達し、会館としての心配事項等の館内視察を行い EXP/J（エキスパンションジョイント）部の仕上げ材のゆがみや天井材のズレ等につき説明をして、納得・安心を得てもらった。

(5) 活動サイトでの情報収集と被災判断、活動方針の共有

活動サイトは、どのサイトもパンケーキ状の崩壊であり、要救助者の生存の可能性は低く、捜索や救助の活動も困難な状況である。

1) 現場①：ブリターニャ 81　6 階建ての集合住宅

現場状況としては、典型的なパンケーキ崩壊で、梁型がないため各層のすき間は崩壊した小さな瓦礫で止まっているだけで、わずかなすき間（10～20cm 程度）しか存在しない。ただし、現場は安定している。また、建物の右側はまだ完全には崩壊しておらず、余震等により崩壊の危険性はあるが活動箇所に影響はないと報告する。

ようやく資機材が到着。要救位置上部床（ボイドスラブ厚 50cm 程度）3 層の 2 層目まで

をメキシコチームが重機使用で撤去を行った新たな空間で足部を確認。

調整の結果、これ以降 JDR が活動することになる。

活動箇所上部に崩壊した 4 層目のボイドスラブがせり出し、余震等で崩壊する危険性があるためレスキューサポートを使用し安定化を図り、要救を害さないよう慎重に救助活動を行う。要救の頭部を確認するが、余震が発生したため活動を一時中断。余震による危険性はないか安全確認行い活動を再開する。

2）現場②：アルバロ・オブレゴン 286　7 階建ての店舗・各種学校等が入居

崩壊はパンケーキ状。建物の両サイドが現状を維持し中央部が垂れ下がる状況であった。1 階は断面も大きいことから現状を維持していた。しかし上部の床の荷重が 2 階の床にかかるため、多数のポストショアで支持し、安定化を図っていた。

米国・イスラエル・メキシコが活動中。日本隊が加わり建物を 4 分割し各国が対応した。屋根であった床から下部への捜索からの活動だが、床の安定化が図れない状況や雨後の測定で垂れ下がる床が移動したとの報告もあり、安定している隣のビルよりロープにて隊員をつなぎ作業にあたるように中隊長に進言した。また、床のズレや傾き、隣の建物との離隔の変化等のモリタリングを実施した。

変化があればすぐに退避できるよう、モリタリングのための隊員を配置してもらった。

3）現場③：トラルパン　6 階建ての集合住宅

崩壊はパンケーキ状、1 階は現状維持、2 階から上部の床が重なり合っている状態。梁型（200×400 程度）があり 30～40cm の空間が期待できる。しかし壁がれんが造、家具等も散乱し捜索も困難を極めた。ヘイリングやテクニカルサーチ、ドッグサーチ等で 3 階に反応あり。

活動方針は最上部よりのブリーチング、到達階では横方向への瓦礫をかき出しながらの活動となった。床には上階の大きい荷重がかかり亀裂も多数入った状況を報告された。

構造評価として進入階の上床の安定化、少し傾いて重なり合った上階の床の移動、屋上の小屋の倒れ等の危険要素を共有。

上床の安定化は短いポストショアを設置、上階の床の移動と屋上の小屋についてはレーザー距離計によるモリタリングを実施した。最初は 5 分間隔、変化がなければ 10 分間隔とした。記録は数字を聞くだけでなくグラフに落とし、測定誤差や大きい変化後の傾向を把握する考察が必要だ。

崩壊した建物の平面図入手の依頼が重要。内部の間取りが分かっているのといないでは隊員にかかる負担が違う。報告された内容も正確さを欠き共有できない。図面入手が困難な場合や、情報提供者のヒアリングで得たことより大体のスパンから平面図を作成することも重要なこと。隊員からの情報も正確なものとなり指揮所との情報共有に役立つと判断できる。図面作製は SE にとっていつものこと、手慣れているので気兼ねなく依頼してほしいものだ。

ショアリングの製作では、メキシコの大工さんのボランティアによるショアリングセンターがサイト近くに設置され救助隊の要望に対応してくれた。JDR の FOG（Field Operations Guide）とは若干違うが使えるものと判断した。隊員は製作する労力がなく材料調達の心配もない。早いし注文どおり。しかし良いシステムだがどの国でもとはいえない。

（6）問題点・課題

1）派遣決定に際しJICAよりのオファー

今回オファーに対応した隊員は登録16名中3名。SEは民間人であり事務所を預かる人や設計事務所勤務の人たちにより構成されている。今回たまたまなのか、自身の仕事での辞退が多い。連絡がつかない人もいたが、ちょっと少ないと感じる。派遣場所や時期での人選に余裕がなく、今後高齢化のこともあり検討する必要があると考える。構造技術者の形態にもより派遣時のオファーに応えるのに時間がかかったり、許可がとれない職種もある。現在の登録者はほとんどが専業設計事務所の役員等であり、上記対応が比較的自由な自分が決めればOKという人たちのはず。JICAとも相談し検討していきたい。

2）モニタリング

今派遣での重要な仕事としてモニタリングがある。滑り・移動や傾き、亀裂の有無と増大の経過変化等の観察である。SEは許可によりホットゾーンに入っての作業はできるが、崩壊建物への進入や瓦礫の上に登ることはできない。亀裂の観測は隊員にマーキングをして長さや幅の測定が可能。建物上部の高所の位置の変化は、指揮所の近傍での計器測定に頼るほかない。現在JDRで使用しているレーザー距離計は簡易だが、定点観測には難しく誤差も多い。危険な兆候の把握には、トランシット型の位置測定器の導入を検討したい。長さの把握だけでなくその点の三次元の位置が把握できる機材が望まれる。

3）崩壊建物内部の情報共有

今派遣ではカメラで撮影したデータを指揮所にてWi-Fiでタブレットに転送し、大きく拡大して情報の共有ができた。大きな変化ではあるがリアルタイムではない。撮影している隊員と無線で交信し、撮影のデータがそのまま指揮所で観察できることが大事ではないか。また、初期サーチングで外部隊員が操縦する自走ロボットによる観察で隊員が突入する前に内部の安全性の検証もでき、安定化の方法の検討もできることや、上空よりのドローンによる撮影で形の把握や大きな陥没がないか等、救助に役立つ情報の収集も、検討する価値があるのではと思う。

4）構造評価専門家の中隊との帯同

SEが2名体制になって活動での中隊帯同が可能となった。救助活動での助言もSEの目で状況を把握し、建物の概要・隊員の安全を守るための安定化措置・救助計画への意見等の助言が速やかにかつ適切に行えるようになった。しかし相当に重いプレッシャーのかかる助言であり、SE同士の意見交換が欲しいときもある。そのための交信手段の貸与の検討をお願いしたい。

派遣全体を通し、構造評価専門家としての初期の目的である活動ができ、迷惑もかけず職務を全うすることができましたこと、指揮本部、各中隊の皆様のご協力があったからこそのことと思います。これからもよろしくお願いいたします。

３－10　通信班

警察庁東京都警察情報通信部　　杉浦　嘉信
警察庁関東管区警察局情報通信部　西垣　暢人

(1) 活動概要

- 通信機器（無線機、衛星通信機器、現地携帯電話）の保守・管理・指導
- 本部もしくは活動現場における通信手段構築・無線運用
- 時系列の作成
- 指揮本部の電源確保

(2) 活動詳細

1) 通信機器保守・管理・指導

活動期間中における各種通信機器の運用計画の策定・配分、予備機の管理を行った。配分した機器については、使用方法等の指導を行った。また、消耗バッテリーの充電及び電池の補充を行った。

2) 通信手段構築・運用

指揮本部に高利得アンテナを設置したが、設置場所の地理、周辺の環境により活動現場との無線による通信の確保ができなかった。また、活動現場にて通信対策を実施したが、やはり無線通信の確保ができなかった。結果的に現地携帯電話による活動状況の情報収集となった。

衛星通信機器（B-GAN）の設置をしたが、無線同様、指揮本部設置場所の環境により常設ができなかった。

3) 時系列の作成

現地携帯電話で収集した情報及び指揮班や部隊の活動状況の時系列を作成した。

4) 指揮本部の電源確保

メキシコの電源電圧は 120V であるため、AC アダプター使用であれば日本規格の機器はそのまま運用可能であった。コンセントしかない機器にあっては直接使用できないことから注意を行った。

(3) 反省・検討事項

1) 無線通信の運用について

各訓練において無線通信は確実につながる環境で行っている。しかし今回実際の現場においては、指揮本部設置場所の地理、周辺の環境及び活動現場との距離により、無線通信の確保ができなかった。また、衛星通信機器（B-GAN）の設置をしたが、無線同様、指揮本部設置場所の環境により常設ができなかった。条件により必ず無線通信及び衛星通信が確保できるものではないことを理解し、現地携帯電話網等が活用できるのであれば、積極的に活用しなければならない。

今回の派遣で、JICA の新しいシステムが持ち込まれていた。そのなかに IP 無線システムが

あった。これは、B-GAN（衛星通信）を利用して通信を行うものであるため、指揮本部と活動現場の距離の問題がクリアとなる。今回、このシステムを活用できなかった原因は、B-GANのアンテナ部は、地面に直接設置しなければならず、活動現場においてアンテナ部を人物等の影響を受けない安定した場所に設置する方法やスペースがないためであった。

今後のメンテナンス会等でIP無線システムの運用方法を理解するとともに、IP無線システムであれば、アンテナ部を地面や、テント上に設置できるよう、三脚やポールの追加、現地指揮本部用の高利得アンテナ、ポール及び同軸の資機材の追加等について検討し、無線通信の確実な構築に努めたい。

2）航空機搭乗時の通信機器の携帯について

通信班では毎回、通信機器を手荷物（携帯無線機）や預け荷物として機内に持ち込むようにしている。これは、携帯無線機が手元にないことにより、急な活動開始等において、通信手段が確保できないということにならないようにするためである。

荷物等が多くなり、移動は大変であるが、今後も携帯無線機に関しては手荷物で機内に持ち込むよう引き継いでいきたい。

3）JICA所有の新規通信機器取扱い及び運用方法の理解について

今回の派遣中に判明したことであるが、JICAにおいて新たな通信機器（IP無線システム、映像伝送機器）が導入されていた。今回は紹介だけで、取扱い説明等もなかったが、JICAと連携を密にして新規通信機器の取り扱い及び運用方法の理解に努めたい。また、今後のメンテナンス会等を行ったのち、資料を作成することにより他の通信班要員に情報共有を行いたい。

（4）所　感

今回の派遣では、訓練で想定した事態では全く進まず、状況に応じて対応する必要があった。対応できたこと、できなかったことさまざまであったが、無事部隊活動を支援できたことに安堵している。今回の経験を他の通信班要員にも共有し、今後の活動に生かしていきたい。

３－11　業務調整員

JICA：平野　潤一、石坂　哲也、篠　克彦、滝本　哲也、秋山　慎太郎、勝部　司、湊　佑介
青年海外協力協会（JOCA）：中野　照人、新井　大介

（1）結団式

1）PPE配布

通常利用可能である S 会議室前スペースの活用ができなかったため、隊員の受付が実施できず、その結果、幹部を優先的に幹部ミーティング用スペースに移動させることが困難であった。また、PPEの配布に関しても動線を意識したものである必要がある。また、着替えスペースの確保やスーツケース受領場所に係る指示の徹底ができず全体の配布進捗に影響が出た。

FOG は、幹部に対しては幹部ミーティングの席上配布とし、隊員には小隊長経由で手交した。会場が混雑した要因の一つに、結団式参加のために来場している高官とそれ以外の見送りの見分けが難しかったこともあり、見送りのための来場者のアクセス制限等、3庁への依頼と

したい。また、段階的な参集やそのための一時待機場所の指定等も必要。

(2) 救助犬・医薬品の輸出手続き

1) 救助犬

【出国時】

平時に検疫所及び警備犬訓練所との打合せを実施していたことにより、派遣時の書類などに問題はなく、いたってスムーズに検疫手続きを行うことができた。

【帰国時】

行政手続き等にたけている現地通訳スタッフが現地空港検疫所との調整を実施してくれたことにより、手続きは滞りなく行うことができた。

また、事前に日本の検疫所から帰国時に必要な書類作成上の注意点や指導を受けていたことにより、現地空港検疫所に対して書類作成上の必要箇所について的確に伝えることができ、作成に関して特段の問題は発生しなかった。

現地獣医に関しては、現地空港検疫所で用立てし、書類を作成してくれた。

在メキシコ大使から交付されたアテステーションを現地空港検疫所で提示したところ、最優先で日本隊の救助犬に関する業務を処理してくれた。次回の派遣の際も同様の物が用意できれば大変有効であると感じた。

2) 医薬品

救助チームが携行するケタミン（5 本）に関し、成田空港税関事務所にて厚生労働省が発行する証明書を提示し、機内預け荷物にてメキシコまで携行した。なお、今次派遣においては利用がなかったため、医療班により適切に破棄がなされ、医療班から管理簿を受領した。

あわせて、在京メキシコ大使が作成したメキシコ税関当局あて書簡を外務省より受領し、資機材受取時に活用できる体制とした（実際には通関時の利用はなし）。

(3) 臨時会計役

メキシコ事務所経由でクレジットカードが利用可能であることを確認していたため、クレジットカードを持参、また現金を成田空港で受領し、現地活動費として臨時会計役が持参した。

今次派遣においては現地調達を依頼していたが調達が間に合わなかったエンジンオイルをチーム到着後迅速に購入し救助活動で活用したほかは、食料、生活用品など、少量の支出に抑えることができた。

(4) 被災地空港到着時の人員・機材のマーシャリング

空港内における人員のマーシャリングについて、現地大使館員、JICA メキシコ事務所員、先遣隊員で直前まで受入政府の担当と打合せをするも、担当者により回答がまちまちの状態であった。しかし、最終的には現地大使館員が制限区域内でチームを迎え、所定の出口まで誘導した。入国審査は通常どおり個人単位で行い、税関は事前のアレンジによりスムーズに通過できた。制限区域の外では先遣隊員の誘導により整列し、JICA 現地事務所により手配済みであった車両までスムーズに移動、乗車した。なお、空港内では現地の方々より大きな拍手と歓声に迎えられ、隊員の士気高揚につながった。

機材荷受け及び国内輸送についても、現地大使館員、JICA メキシコ事務所員、先遣隊員で航空会社及び現地当局と最後まで調整を重ね、当局の便宜供与によりスムーズな引き渡し後、航空会社の好意により BoO までの移送の手はずを整えた。しかし、直前になり航空会社による輸送がキャンセルになり、荷受けについても想定していた場所と違う場所での荷受けとなった。しかし、大使館員、JICA メキシコ事務所員、先遣隊員、チーム帯同業務調整員で連携しすぐに対処したため、チームの動きに大きな遅れはなかった。また、税関については便宜供与により簡便に荷受けすることができた。

人員・機材ともに現地大使館及び JICA 事務所の多大なる貢献のおかげで、情報が錯そうするなか、大きな遅延等を発生させずに取り扱えた。

(5) 在外事務所・JDR 事務局との調整

1) 受入国在外事務所における応援体制の強化

救助チーム派遣が検討される規模の災害が発生した際には、医療チームの派遣も検討されるケースが大半であることから、時期を逸することなく JICA 本部、周辺の在外事務所から緊急援助業務経験のある応援要員を要請することが望ましい。同要員は JDR 事務局、到着後のチームとの窓口を担うことで、その後の調整がより円滑になり、事務所管理職、緊急援助担当所員への業務集中を回避することにつながる。

今次派遣においては、メキシコ事務所に対して、ボリビア（業務調整員研修修了者）、エルサルバドル、ホンジュラス（事務局勤務経験者）より応援出張があり、経験者が多かったことから能動的な業務の刈り取りができていたと評価できるが、数日派遣を早めることができれば、さらにメキシコ事務所員の業務負荷軽減に貢献できたと考える。

2) 国際緊急援助隊救助・医療チーム受け入れマニュアルの有効性

JDR 事務局は 2017 年 7 月に「国際緊急援助隊救助・医療チーム受け入れマニュアル」を作成し、公電にて全在外あて共有を図っていた。今次派遣調整にあたっても、JDR 事務局－JICA メキシコ事務所担当者間において、同マニュアルに沿った連絡調整並びに現地調達の着実な依頼が早期に可能となり、結果として、初期の活動に必要な資機材はすべて JICA メキシコ事務所経由で調達がなされた。これは迅速な捜索救助活動の貢献要因である。

あわせて、緊急援助スキームの経験がない JICA メキシコ事務所においても同マニュアルを活用することで、各フェーズで事務所が必要となる業務を確認しつつ受入準備を進めることができ、有効性が確認された。

今後さらに、各在外事務所における平時の備えを促進させていく必要がある。

(6) 現地政府との調整

３－５（6）参照

(7) 指揮本部補助

1) 通信手段確保

JICA メキシコ事務所より救助チームに対して現地携帯電話 10 台、Wi-Fi ルーター4 台の貸与があった。BoO と救助現場は無線通信が不可能な距離（市街地では約 1km までが無線通信

可能な距離）があり、貸与携帯を最大限活用した活動が展開された。また、通信量の制限のない Wi-Fi ルーターの貸与があり、指揮本部における、効率的な連絡調整につながった。

JDR 事務局からはイリジウム携帯を 3 台、B-GAN3 台を持参し、緊急時に備えていたが、上記環境を構築できたため、現場での利用は不要となった。また、成田空港で民間のレンタル会社から借りた Wi-Fi ルーターは一日当たりの利用通信容量の上限があったことから、利用は一時的なものとした。

2）画像伝送装置の活用

本機材の運用はいまだ未策定ではあるものの、業務調整員が救助現場にてロジ業務サポート任務に就いた際携行し、BoO に対して動画を送信した。動画を確認した副団長からは、現地の状況が非常によく理解でき、隊の安全対策上も有効である点が伝えられた。

なお、立ち上げ時に JDR 事務局に設置されているサーバー機の不具合が発生（windows のシステム自動更新による設定の解除）したことから、自動更新には留意し、余裕があれば出発までに試験接続をしておくことが望ましい。

（8）BoO

今次派遣では、日墨協会が所有する日墨会館を BoO として提供頂いた。

地下 1 階、地上 2 階建ての建物で 1 階には日本食レストランを併設する。2.2 万平米の敷地内には、メキシコにおける日系移住史を展示する「あかね記念館」やテニスコート、プール、芝生広場と日本庭園を有する。また、日系人慰霊碑も設けられている。

隊員は 2 階の階段前を指揮本部とし、大広間入口廊下を食堂、大広間を就寝スペースとして活用した。また、駐車場は広くさらに地下倉庫と直結しており、資機材の運び込み、管理が非常に容易であった。地階には大倉庫横に小倉庫があり、そちらをデコン入口として、屋内にヘルメット、ブーツ等の保管が可能であった。

日系人会館の好意で、同施設が有するシャワーの利用が可能であったとともに、温かいコーヒーや給湯器、ソフトドリンクなども提供を頂いた。

今次災害は局所的であったため、BoO においても電力、水等が不足することはなく、トイレやシャワーについても会館施設の利用が可能であった。レスキューフーズの作成に大量のお湯を要したが、一時的に持ち込み資材のガソリンストーブを利用したものの、日系人協会より貸与頂いたカセットガスコンロ 2 台を利用でき、こちらも非常に助けられた。

同会館は建設当時、同国において大規模災害が発生した際の日系人の避難場所として、またメキシコ国内の復旧・復興支援の場となることを想定して建設されたとのことである。建設当時の日系人の方々の志を継ぐ日系協会に支えられ、JDR の活動拠点として安心しての活動実施につながった。

所在地：Fujiyama 144, Águilas, Alvaro Obregon, CDMX, メキシコ
滞在期間：2017 年 9 月 21 日（木）～26 日（火）

(9) 資機材

1) 捜索救助資機材

救助資機材について、資機材担当隊員に対して輸送区分⑥の資機材輸送が航空機の搭載量の関係から輸送できなかったことや派遣ファイルに全量記載のパッキングリストと輸送区分⑥が削除されている今次派遣資機材のインボイスが綴ってある旨の説明不足から、もともと輸送していない資機材について「機材の一部が届いていない」との混乱を招いた場面があった。

資機材の保管場所については、中隊専用の輸送トラックが手配できたことから、あらかじめ必要な救助資機材等をトラックの荷台に積み込み、出動に備えた。

また、その他の資機材に関しては、BoO として使用した日墨会館の 1 階倉庫へ搬入し、区分ごと分けて保管を実施した。

2) 生活・通信・記録用資機材

本派遣では BoO を日墨会館に設定したため、生活資機材についてその多くを使用せずに済んだ。通信・記録資機材（事務局持ち出し資機材）については、同じ機器が複数あり、またそれぞれに細かな付属品が多くあるため、物品管理が難しかった。今後は、管理表を作成したり管理担当を指定するなどして管理方法の向上が図られる必要がある。

(10) 現地調達

今回、現地にて調達を行ったものは、①救助活動用消耗資材（2 ストロークオイル）、②デコン用資材、③リフレッシャー、④新聞、⑤救助機材メンテナンス用消耗資材の 5 点。

空港より貨物扱いにて到着した活動機材を引き出し、BoO に移送したのち、活動開始に備え JICA メキシコ事務所にて事前調達されていた資材を確認したところ、異なる 2 種の SAE の 4 サイクルエンジン用オイルのみで、2 ストロークオイルがなかった。日墨協会関係者（メキシコ人）の協力を得て、大手スーパーや DIY ショップ、自動車用品店を回って 2 ストロークオイルを探したが、メキシコでは 2 ストロークオイルは一般的でないようで販売されていなかった。そこでガソリンスタンドを回り、オートバイ用に販売されている小ボトル（200ml 程度）のものを大量に購入した。この際、現地通貨を持ち合わせておらず、米ドルの使用は不可であったため、メキシコ入国時に空港にて現地通貨への換金を行っていなかったのは大きな反省点である。

デコン用資材として調達したのは、バケツ、ブラシ、粗泥落としマット、コートハンガー、ハンガーラック。

活動中盤に入ってからはリフレッシャーとして、糖分入り飲料水、コーヒーや紅茶、果物等を調達した。

一日の終わりには情報収集用に各国 USAR チームに関する記事が掲載されている日刊紙を調達するようにした。

撤収前の活動機材メンテナンス用消耗品として、ウェス、金ブラシ、潤滑油、廃油受け等を調達した。

BoO 所在地はメキシコシティの中心部にあり、米国資本の大型スーパー（Costco、Walmart 等）が近辺に多数あり、また、市内の通信、物流インフラの混乱も大きくはなく、また、市内の物資の不足もみられなかったため、現地調達に苦慮することはなかった。

（11）傭上管理

通訳者、車両及びドライバーは事前に JICA メキシコ事務所で手配済みであったため、スムーズに運用できた。

1）現地通訳

活動開始当初、8 名の通訳者手配であったが、人員不足が見込まれたため、翌日に 3 名、翌々日に 1 名追加し合計 12 名とした。現場ごとに通訳者 2 名、BoO には会議等へ同行要員を配置し、24 時間のローテーションを組んだため、この人数が必要となった。

活動現場によっては倒壊した建物上部での通訳が求められた。通訳者は災害現場が不慣れであり、装備も不十分であるため、事前ブリーフィングでは現場での依頼に対し無理をしないよう注意喚起を行った。今回、通訳者が現場での依頼を断ることはなかったが、隊員にもその点について理解を求める必要はある。しかし最前線での通訳が必要となる状況が発生した場合、判断は難しいと思料する。

2）車両・現地ドライバー

現場手前で現地当局による規制線が張られており、その車両（またはドライバー）が JDR であることが理解されないと通過に時間を要することがあった。ドライバーに JDR ワッペンを配布し対応した。

ヘルメット・防寒着はそのときに現場に出る人にのみ貸与し使い回せるが、JDR ワッペンは「現地で傭上する人」の数量を準備し、全員が身に着けることで現場での活動が円滑になると思料する。

（12）広　報

1）メディア対応

現地の各新聞には JDR の救助活動の写真が連日大きく掲載されるとともに、テレビやネットニュースでも数多く取り上げられた。いずれの現地メディアも日本の救助活動を高く評価した報道であったこともあり、JDR の活動に対する好意的な世論の醸成につながった。他方、本邦メディアも NHK や時事通信、テレビ朝日から電話などを通じて取材の申し込みがあり適宜対応した。

メディアからの取材申し込みについては、基本的には団長もしくは広報担当副団長が対応する方針をとった。しかしながら、現場では団長、副団長が不在のなか、現地メディアが業務調整員に直接インタビューを申し込み、断りきれずに対応せざるを得ない場面があった。好意的に取り上げてくれようとしているメディアに対して取材を断るのは、悪印象を与えるだけでなく、せっかくのアピールの機会を失うことにもなるので、事前に想定問答などを準備し、その範囲内であれば、各業務調整員も回答してもよいことにするなど、柔軟な対応が必要と思われる。

2）記者懇親会

現地活動 5 日目である 9 月 25 日に現地及び日系メディアを対象とし、BoO 内において「記者懇親会」を開催した。

記者懇親会には計 8 社（毎日新聞社を含む）9 名の参加があった。冒頭、団長がメキシコでの活動報告を行い、続いて記者との質疑応答が交わされた。質疑応答は団長に加え、広報担当副団長が対応したが、すべての記者からは日本への深い感謝の意が述べられ、活発な意見交換も交わされた。また、記者懇親会前後の時間帯を利用して、業務調整員がレスキューフードや救助機材について紹介したり、現地で掲載された新聞の切り抜き記事を壁に掲示したりすることにより、メディアに JDR の活動をより一層理解してもらうための工夫も行った。

なお、今回の記者懇親会では、受付や司会進行については在メキシコ日本大使館の広報班に対応を依頼した。このことにより、業務調整員は記者対応などに時間を割くことができ、結果的に各メディアへの丁寧な対応につながった。

3）記録データの管理・共有

出国から帰国にかけ、すべての場面においてビデオカメラもしくはデジタルカメラを用いて記録をとった。

業務調整員が可能な限り現場などを中心に撮影したが、すべての活動を網羅的に撮影することは不可能であるため、各小隊にもデジタルカメラを貸与し、撮影を行ってもらった。

撮影したデータは、各小隊で撮影した写真も含め、帰国直前に 1 台の業務用パソコンにすべて集約し、日付ごとに整理を行った。

なお、これら保存した写真については、各隊員も所属元での報告用に欲しいとの要望が多くあったことから、USB を 40 個現地調達し、帰国日に USB へデータをコピーしたうえで各小隊に配布した。

4）現地での情報発信

在メキシコ日本大使館では Facebook や Twitter など SNS を通じてリアルタイムで数多くの発信があったが、投稿に対する反響は非常に大きく、団長の活動報告を取り上げた動画投稿では 5 万 8,000 件以上の好意的なリアクションがあった。日本大使館では写真だけでなく、動画なども多数投稿し、救助の様子をきめ細かく発信することにより、多くの関心を集めたが、今回の経験を通じて、現地広報において SNS はかなり有効な広報ツールであることが証明された。

（13）捜索救助現場ロジ

活動サイトは、捜索 2 日目（9 月 22 日）未明までは「ブリターニャ 81」、「アルバロ・オブレゴン 286」の 2 カ所、2 日目朝以降は「トラルパン」1 カ所となった。

1）ブリターニャ

活動現場ブリターニャは、隊が被災国に到着した直後に向かった場所であった。したがって、空港からの通関手続きを理由として機材も到着していない状況で、隊員 10 名程度、2 頭の救助犬で着手した。業務調整員の活動としては、車両管理、通訳管理、食事準備、広報素材撮影、必要物品調達、トイレ、テント、群衆管理、廃棄物管理、機材管理、など多岐にわたる業務が多少発生した。結果として、最もかかわりが深かった業務は①広報素材撮影、②必要物品調達、③通訳管理であった。

本サイトは初期の活動であったため広報素材撮影に注力し、活動期間中のほとんどの時間に 1 名を割いて実施した。結果としてご遺体 1 体の収容となったが、活動初期においては生存者救出の瞬間を記録として収めるべく常時待機していたため、専任者を割く必要があった。

物品調達に関しては、ショアリング用の釘、2 サイクルエンジンオイル、4 サイクルエンジンオイル、粉じん対策用の水を現地調達した。活動現場の周りには軍、警察をはじめ、多くの市民が直近まで押し寄せてきていた。その周りを囲むように、現地ボランティアが作った仮設の資機材置き場が設置されていた。日本チームへの歓待はどこでも見られたが、同現場においても「何が足りない？　何でも調達できるから言ってくれ」という申し出があとを絶たなかった。上述した物品は、依頼すると 5 分以内に必要量が到着するという手際の良さであり、これが日本チームの活動効率の向上に寄与したことは疑いがない。

現場に到着した時点で JICA メキシコ事務所が契約した 3 名の通訳（日西）は 3 名の中心的な隊員に帯同することを指名した。計画担当副団長、中隊長、ハンドラーである。特に活動初期にあっては、現地指揮官との進捗共有、救助犬を使った捜索活動に際しての情報収集などの際に通訳が非常に役立った。加えて、当初から帯同した JICA メキシコ事務所員も通訳業務に参加してくれたが、現地指揮官など上職責者との交渉など、平時業務から慣れている JICA 事務所員の適切な通訳により交渉がはかどり、活動への着手の迅速化を実現できた。通訳全員の活動スケジュールを作成し、ローテーションを組み、休憩（帰宅）するように指示するなど、通訳の労務管理という点でも業務調整員の果たす役割はあった。

現地に依存したのは、トイレ（街角に設置された仮設トイレ利用）、廃棄物（ボランティアによる廃棄物回収）などであった。これらも現地から手厚く提供される機会に感謝しつつ利用させてもらった。

休憩所の設置及び食事準備については、医療班として帯同した 2 名が主にこれを実施した。隊員の疲労や降雨による温度変化などを配慮したうえで提供タイミングを思案しているようであり、単純に食事提供というよりも体調管理を行うためのコミュニケーションの手段として食事をうまく利用していた点は印象的であった。

群衆管理に関して、初期においては日本チームの活動場所を規制線で明示的に区切るように努めたが、市民感情や実質的に支えてもらっているという立場を考慮すると、訓練などで想定しているような明白な現場の区切りがかなわなかった。

遺体収容ののちに、現場での活動が完了し撤収作業となった。BoO への帰路に向けてドライバーへの指示、車両への人数配分など撤収の際にもその場を仕切って調整することが必要となり、このような場合にも業務調整員の帯同は役立ったといえるだろう。

また、必ずしも業務とはいえないものの、過小評価すべきでないのは、業務調整員のもつ国際感覚かもしれない。特にブリターニャのように現地からの支援を提供されるなど、現地住民との接点が避けられない状況において、隊員と現地住民のコミュニケーションをとりもつ役割が業務調整員に求められたように感じる。テレビカメラがライブで記録しており、ボランティアや軍などが近くで活動し、規制線の外では一般住民が隊員の一挙手一投足を注視しているなかで、救助活動以外の部分で日本チームの評価が決められる要素も少なくない。このような評価を向上させるような「国際感覚」が業務調整員には備わっていると考えられるため本報告書に特記する。

2）トラルパン

2 中隊が交代で作業にあたる体制となったことから、主な食事は BoO でとり、現場では軽食のみをとるようになった。結果、業務調整のロジは軽減され、医療班から依頼される物資の供給程度にとどまった。

他方、「トラルパン」には各国の救助チームやメキシコ国内の USAR が入っており、現場を総括すべき立場にある海軍やメキシコ市民保護局による調整が必ずしもいき届かない状況も発生したため、現場関係者からの情報収集や調整が必要となった。現場には 3 時間交代で現地傭上の通訳が 2 名ずつ付いていたため、基本的には彼らによる通訳を得たが、積極的な情報収集や異変の察知、また時として厳しい態度に出る必要のある調整については、通訳による対応は困難であった。特に、3 日目（9 月 23 日）朝の市民保護局による同サイトの捜索中止の決定の際、また同日午後の再開決定の際には、メキシコ側、日本側にストレスフルな状況が生じたため、業務調整が全面的に通訳業務を実施した。

なお、現地傭上の通訳による捜索現場内での業務遂行については、本人の意思を確認したうえ、命綱やプロテクターを付けて現場に入ってもらったが、危険の伴う捜索現場での通訳については、今後の課題と考えられた。今回は 2 名の業務調整が「現地メディア対応/通訳」として配置されたが、24 時間続く捜索活動を 2 名で通訳し続けることも困難であり、また上述のとおり現場周辺の関係者との調整も重要であることから、一般人へのリスク軽減と適切な通訳業務の遂行の両面を考慮した通訳の手配方法・役割分担が求められる。

（14）機材返送

今次派遣においては隊員輸送時に約 10t の資機材をメキシコまで輸送した。加えて、食料を追加で 1t 後送し、現地で利用した。

救助チーム活動終了後、救助用資機材を中心に成田まで返送する必要があったことから、チーム活動中期に JICA メキシコ事務所より、普段より取引がある信頼性の高いロジ業者を 5 社紹介してもらい、その後は事務局から派遣された業務調整員にて業者との連絡調整を引き取って対応を行った。

最終的にはこちらの求める迅速性（発注から 1 週間で成田着）を満たせる 3 社より見積もりを取り付け、業者を選定した。事前に JDR 事務局において、過去の事例を参考に発注書ひな形を作成し、過去に事務所が起案した関連書類も入手できており、こういった備えが功を奏し、迅速な事務手続きが可能となった。なお、事務局から派遣された同業務調整員は、救助チーム全体の出国後もメキシコに残り、BoO からの全資機材をロジ業者手配トラックへ積載する部分までの業務管理・監督を行い、資機材返送完了後の支払いの段取りを含めて調整を行うことで、JICA メキシコ事務所の業務軽減を図った。今後も在外事務所の求めに応じ JDR 事務局から派遣される業務調整員が現地に残り本業務を実施することが全体最適の観点から適当と思料する。

３－12　先遣隊

JICA　勝部　司、湊　佑介

（1）はじめに

今次救助チーム派遣においては、チーム本隊の迅速な活動着手を目的として先遣隊員を 2 名派

遣した。発災日 9 月 19 日 16:40 発の全日空便で成田を出発し、20 日現地時間 13:55 にメキシコシティに到着した。メキシコという距離的な要素を考慮すると、先遣隊員が 24 時間後に被災地入りできたという事実は迅速な対応であったといえるだろう。同様に、外務大臣による派遣命令が 15:37 であったことを考えると、JICA による派遣迅速化に向けた従来からの取り組みと先遣隊員派遣に関する迅速な決定が奏功した結果となった。

(2) 目　的

先遣隊員を派遣した目的は二つ存在する。まず、チーム本隊が後続で到着した場合に備えて被災国における万全な受入体制を敷くことである。具体的には、被災国空港におけるチーム資機材（救助犬含む）、人員、薬剤などの円滑な入国手続き、被災中心地までの輸送手段の確保、隊宿営地の選定、現地 JICA 事務所との連携促進、これらすべてを含む情報収集などが挙げられる。

次に、救助チームが活動するサイトの特定である。チーム本隊が被災国に到着してから活動地の選定を始めたのでは遅く、相当な時間の損失が予想される。ことに生存者の救出という目的を掲げた救助チームの活動は「時間とのたたかい」であり、被災国空港への到着から被災中心地におけるサイトでの活動着手までの時間が短いことが生存者救出への不可欠な要素である。この考えに基づき、関連する情報を収集し被災国側の活動調整者と協議を重ねることにより、チーム本隊が到着した際にできるだけ迅速に特定されたサイトに導くことができる環境を整えておくことが二つ目の目的である。

(3) 具体的な業務

この目的を達成するために、先遣隊員の業務はチーム本隊受入れのための後方支援業務とサイト特定のための調整業務の二つに大別し、先遣隊員 2 名がそれぞれに専従した。

実際の業務は成田空港への移動中から開始した。到着後計画（Plan of Arrival）と称して、目的達成のために実施すべき事項の洗い出しに加え、2 名の役割分担を協議した。成田空港までに大枠の頭づくりを行い、出国までに入手した情報を整理分析し、メキシコシティ到着の 2 時間前に改めて機内で協議を 20 分程度行った。なお、この時点での活動シナリオとして描いていたのは、JICA 事務所及び日本大使館から近く後方支援ラインが延びすぎないメキシコシティにおけるコンクリート造の倒壊建物での活動だった。また、特に被災直後からメディア露出が高く、要救助者の人数が多く、被災状況に対しての対応規模が十分ではないように見られた、エンリケ・レブサメン小学校は活動サイトとして最有力候補の一つとして念頭に置いていた。

メキシコシティ空港に到着し、入国手続きで接した空港内の観察と 30 分程度の車両移動中に車窓から見えた情報を総合すると、電気・水などのライフライン、輸送、行政などの公共サービスが機能しており、被災サイトへのアクセスが可能であること、目立った治安の悪さがないことなどが理解できた。

JICA 事務所との協議後にサイトの実査を行った。事務所職員及び大使館員と 6 名程度で倒壊建物をめざして車両で近づいたが、実際の被災建物から数ブロックの距離からは人込みと規制で通行ができない状況だった。道路の隆起や液状化などは見られず、人込みなどさえなければサイトには容易にアクセスできるうえ、特に隘路などもなく重機や救急車などの利用も問題ないことが理解できた。一方で、市内外から善意の下に集まったトポス（ヘルメットを被り、つるはしなどをもったボランティア）と呼ばれる人たちは、安全管理上、最も大きな懸念になることが予想

された。既にこの時点では、救助サイトからトポスたちをむげに締め出すということは避けてほしいというメキシコ政府からの依頼について、メキシコ事務所を通じて了解していた。国民感情に配慮した同政府の方針とのことであった。

現場への立ち入り規制により、サイトそのものの情報収集は難しかったものの、実査の結果により、サイトを得るためにはメキシコ政府内におけるトップダウンの意思決定が不可欠である点を確認。その後も JICA 事務所において深夜まで協議を重ね、翌朝からサイトの交渉及び後方支援業務の準備を再開することとした。

明けて翌朝は、8:00 から作業を開始し 13:55 のチーム本隊到着までの 6 時間程度ですべての準備を完了させる必要があった。先遣隊員 2 名の行動を完全に分離し、1 名は前日にアレンジした空港における入国管理、税関、検疫手続きの最終確認を行うとともに、宿営地として確保してある場所の確認及び輸送に関する準備を行った。

残りの 1 名は JICA 事務所において実施されたメキシコ外務省との調整会議に参加。日本を含む国際チームの受入手続きの確認を行うとともに、サイト選定調整を実施。会議においては、日本チームの能力や特性を根気強く説明し、USAR 活動が実施できるサイトの割り当てを要望した。

同調整会議においては、空港における受入手続きの最終協議がなされた。結果として、ターミナル 1 であってもターミナル 2 であっても調整会議中において、C5（メキシコ市行政による危機対応部署）が現場における調整を担っているとの言及があり、同会議後に即時出発し C5 に車両で移動することとなった。

C5 に到着し責任者と面会すると、他の国際チームが調整会議を行っている場所が C5 横の公園にあるということでこちらに向かい調整会議に参加。INSARAG で規定されている USAR Team Factsheet を提出した。調整会議は行われず、メキシコ市側の調整責任者によると、国際チームによる対応が本格化しチーム数も増えることが想定され、また C5 庁舎裏の公園では手狭になったという理由から、メキシコシティ空港近隣の CNAR に新たな国際チーム活動調整所（Puesto De Comando Ayuda Internacional）を設置するため、日本とのサイト調整に関してもこちらで行いたいとの情報を入手した。

CNAR に移動すると、既に到着した日本チームがメキシコ政府と協議を行っている最中であった。サイト選定に際し、同政府側から特にサイトの指定があるわけではなく、現地案内人と一緒にサイトを見て回り、活動を実施したいサイトがあれば案内人にその旨を伝えてほしいというものであった。あいまいな情報を頼りに多くの選択肢をもちながら現地を見て回ったところで時間の浪費になる。前日に実査を行っていたサイトであればヘビーUSAR 活動実施に値するサイトだと考え、現地新聞の切り抜き情報を現地案内人に見せ、地図上「10 番」の場所に直接連れて行ってもらうように依頼した。この「10 番」がのちに日本チームにとって最初の活動サイトとなるブリターニャであった。調整会議後は到着したチーム本隊に吸収され、先遣隊員としての任務を終えた。

（4）JICA メキシコ事務所との連携

先遣隊員が事務所に到着した時点では、前日に東京から依頼のあった便宜供与依頼事項のほとんどが既に完了していた。具体的には通訳、車両、ドライバーなどの傭上関係、通信機器の手配、被災国関係機関との連絡などである。対応初期において、この支援があったからこそ、先遣隊員が本来業務に注力することができたことは特筆すべきである。

具体的には車両の手配、通訳人材もしくは事務所員の帯同による言語的な支援、現地政府側調整先との取り次ぎ、先遣隊員の宿泊手配、現地における構造的特徴の解説、治安情報の共有など非常に多岐にわたる支援の提供があった。

活動上は、所長がオペレーションの責任者としてかかわり、実際には次長が実務にかかわる全般を管理した。先遣隊員は次長にすべての調整状況や必要支援などを集約するように努め、次長を司令塔として後方支援体制が敷かれるように業務を実施した。

現地事務所は、被災国の内情に精通しており従来からカウンターパート（被災国政府）と深い信頼関係を構築しているだけでなく、スタッフ及び機材さらには専門人材を含めたリソースを豊富に有している。他方、先遣隊員はチームに関する事情に精通しており、チーム活動に関する詳細や当該分野における相場観を有しているため、チーム受入れに係る業務の負担低下に寄与することができる。

今次派遣においてはJICAメキシコ事務所、現地日本大使館、日系コミュニティからの多大な支援なくして活動は不可能であった。後方支援に関してメキシコ事務所などの受入負担は大きかったため、一層の受入業務の効率化と適正化に向けてJDR事務局と在外事務所を巻き込んだ先遣隊活用の議論が必要であることが強く感じられた。

(5) 成　果

メキシコ側の日本大使館及びJICA事務所などの手厚い支援があったため、先遣要員に求められた二つの目的は多くが達成できた。特に空港受入時の手続き及び輸送準備などはかなり迅速に実施することができた。また、サイトの選定に関しては、生存者救出には至らなかったものの、最善を尽くして調整した結果、空港からの時間損失がなくサイト入りできたことも成果として挙げられるだろう。

(6) 所　感

JDRチーム展開の特徴としては、JICA在外事務所及び在外公館が世界中に存在していることをアドバンテージとした、被災国ネットワーク活用を前提とした自己完結といえる。被災国事務所や在外公館は被災者の一部であることも考慮すれば、できるだけチーム自体が自己完結であることが望ましいのはいうまでもないが、ネットワークを含んだ自己完結の考え方自体は合理的であり、後方支援拠点が現地に根差していることを考慮すれば、外国から物量を投入するよりもはるかに効率的であるだろう。このアドバンテージを生かすためにも、受入事務所となる可能性がある諸国への事前の準備が肝要であり、今回のメキシコ対応を事例として、今後の体制改善に努める必要がある。

付　属　資　料

１．活動日程

２．メンバーリスト

３．駐日メキシコ大使感謝状

４．報道資料

５．活動日報

６．国連人道問題調整事務所による状況報告書

７．メキシコ合衆国政府に提出した報告書

１．活動日程

活動日程

日　付		日本時間	現地時間	チーム活動等
9 月 20 日	水	03:14	13:14	プエブラ州南約 55km で地震発生（M7.1）
		15:37		国際緊急援助隊救助チーム派遣決定
		17:05		先遣隊成田発
			15:20	先遣隊メキシコシティ着
9 月 21 日	木	10:15		結団式
		14:25		第 1 陣　成田空港発
		17:05		第 2 陣　成田空港発
			12:30	第 1 陣　メキシコシティ着
			15:24	第 2 陣　メキシコシティ着
				ブリターニャ、オブレゴンで捜索救助活動実施
9 月 22 日	金		02:21	ブリターニャにてご遺体 1 名救出完了
				ブリターニャ、オブレゴンでの捜索救助活動終了
				トラルパンで捜索救助活動実施
9 月 23 日	土		07:55	オアハカ州で M6.2 の地震発生。活動中断のち再開
9 月 24 日	日			トラルパンで捜索救助活動継続
			15:09	トラルパンで生存犬 1 頭救出。飼い主に引き渡し
				トラルパンでの捜索救助活動終了
9 月 25 日	月			メキシコ合衆国外務大臣表敬
				メキシコ海軍資機材視察受入れ
				記者会見実施
				メキシコ政府主催の壮行会出席
9 月 26 日	火		01:50	第 1 陣　メキシコシティ発
				メキシコシティ市長への報告実施
				在メキシコ日本大使館への報告実施
9 月 27 日	水	06:20		第 1 陣　成田着
			01:50	第 2 陣　メキシコシティ発
			02:20	第 3 陣　メキシコシティ発
9 月 28 日	木	06:20		第 2 陣　成田着
		06:40		第 3 陣　成田着
		08:30		解団式

２．メンバーリスト

メンバーリスト

国際緊急援助隊救助チーム隊員（72 名）

1	川﨑	敏秀	Kawasaki	Toshihide	外務省	団長
2	大石	光泰	Oishi	Mitsuyasu	警察庁長官官房国際課	副団長
3	鈴木	健志	Suzuki	Takeshi	総務省消防庁	副団長
4	中末	陽介	Nakasue	Yosuke	海上保安庁警備救難部救難課	副団長
5	山根	誠	Yamane	Makoto	国際協力機構	副団長
6	杉浦	嘉信	Sugiura	Yoshinobu	東京都警察情報通信部	通信班
7	西垣	暢人	Nishigaki	Nobuhito	関東管区警察局情報通信部	通信班
8					警視庁	ハンドラー
9					警視庁	ハンドラー
10					警視庁	ハンドラー
11					警視庁	ハンドラー
12					警視庁	ハンドラー
13					警視庁	中隊長
14					警視庁	中隊長サポート
15					神奈川県警察	小隊長
16					警視庁	救助隊員
17					警視庁	救助隊員
18					警視庁	救助隊員
19					警視庁	救助隊員
20					警視庁	救助隊員
21					警視庁	救助隊員
22					警視庁	救助隊員
23					神奈川県警察	救助隊員
24					神奈川県警察	救助隊員
25					神奈川県警察	救助隊員
26					神奈川県警察	救助隊員
27					神奈川県警察	救助隊員
28	木下	修	Kinoshita	Osamu	東京消防庁	中隊長
29	浅見	賢一	Asami	Kenichi	東京消防庁	中隊長サポート
30	依田	次生	Yoda	Tsuguo	東京消防庁	小隊長
31	平塚	一広	Hiratsuka	Kazuhiro	仙台市消防局	小隊長
32	小林	弘和	Kobayashi	Hirokazu	東京消防庁	救助隊員
33	田端	健二	Tabata	Kenji	東京消防庁	救助隊員
34	齊藤	学	Saito	manabu	東京消防庁	救助隊員
35	佐々	伸也	Sasa	Shinya	仙台市消防局	救助隊員
36	岩佐	治	Iwasa	Osamu	仙台市消防局	救助隊員

37	木俣	智行	Kimata	Tomoyuki	京都市消防局	救助隊員
38	中川	和将	Nakagawa	Kazumasa	京都市消防局	救助隊員
39	竹中	龍悟	Takenaka	Ryugo	京都市消防局	救助隊員
40	平井	康介	Hirai	Kosuke	朝霞地区一部事務組合	救助隊員
41	小椋	弘樹	Ogura	Hiroki	豊中市消防局	救助隊員
42	梶本	敦司	Kajimoto	Atsushi	和歌山市消防局	救助隊員
43	浅川	太智	Asakawa	Taichi	高知市消防局	救助隊員
44	上領	直人	Kamiryo	Naohito	海上保安庁羽田特殊救難基地	小隊長
45	宮地	龍啓	Miyaji	Tatsuhiro	海上保安庁羽田特殊救難基地	救助隊員
46	増岡	和明	Masuoka	Kazuaki	海上保安庁羽田特殊救難基地	救助隊員
47	權田	昭文	Gonda	Akifumi	海上保安庁羽田特殊救難基地	救助隊員
48	大塚	祥平	Otsuka	Shohei	海上保安庁羽田特殊救難基地	救助隊員
49	本内	亮太	Motouchi	Ryota	海上保安庁羽田特殊救難基地	救助隊員
50	権代	将彦	Gondai	Masahiko	海上保安庁小樽海上保安部巡視船えりも	救助隊員
51	佐藤	栄将	Sato	Eiichi	海上保安庁仙台航空基地	救助隊員
52	加藤	惇史	Kato	Atsushi	海上保安庁関西空港海上保安航空基地	救助隊員
53	濵田	洋弥	Hamada	Hiroya	海上保安庁長崎海上保安部巡視船でじま	救助隊員
54	坂田	茂伸	Sakata	Shigenobu	海上保安庁美保航空基地	救助隊員
55	渡邊	翼	Watanabe	Tsubasa	海上保安庁新潟航空基地	救助隊員
56	西村	直哉	Nishimura	Naoya	海上保安庁鹿児島航空基地	救助隊員
57	井上	潤一	Inoue	Junichi	地方独立行政法人山梨県立病院機構 山梨県立中央病院	救急医療
58	城川	雅光	Shirokawa	Masamitsu	都立広尾病院	救急医療
59	阪本	太吾	Sakamoto	Taigo	日本医科大学千葉北総病院	救急医療
60	山口	直樹	Yamaguchi	Naoki	社会福祉法人恩賜財団大阪府済生会 千里病院	救急看護
61	坂本	良子	Sakamoto	Yoshiko	順天堂大学医学部附属練馬病院	救急看護
62	高橋	勇	Takahashi	Isamu	（株）構造コンサル東日本	構造評価専門家
63	小倉	隆	Ogura	Takashi	一級建築士事務所（株）アルテック	構造評価専門家
64	平野	潤一	Hirano	Junichi	国際協力機構	業務調整員
65	石坂	哲也	Ishizaka	Tetsuya	国際協力機構	業務調整員
66	篠	克彦	Shino	Katsuhiko	国際協力機構	業務調整員
67	滝本	哲也	Takimoto	Tetsuya	国際協力機構	業務調整員
68	秋山	慎太郎	Akiyama	Shintaro	国際協力機構	業務調整員
69	勝部	司	Katsube	Tsukasa	国際協力機構	業務調整員
70	湊	佑介	Minato	Yusuke	国際協力機構	業務調整員
71	中野	照人	Nakano	Teruhito	（公社）青年海外協力協会	業務調整員
72	新井	大介	Arai	Daisuke	（公社）青年海外協力協会	業務調整員

La Embajada de México en Japón
a nombre del pueblo mexicano
otorga el presente

RECONOCIMIENTO

Al Equipo de
Ayuda en Catástrofes de Japón
(*Japan Disaster Relief Team, JDR*)

Por su heroico apoyo en las labores de rescate tras el terremoto ocurrido en la Ciudad de México el 19 de septiembre de 2017. La generosidad de Japón permanecerá siempre en la memoria de los mexicanos.

Tokio, Japón, 28 de septiembre de 2017

Carlos Almada
Embajador de México en Japón

在日メキシコ大使館は
メキシコ国民の名において
この賞状を贈ります

表　彰　状

日本国際緊急援助隊・救助チーム　殿

貴援助隊は　2017 年 9 月 19 日にメキシコ市を襲った
大地震の被災地へ派遣され　救命救助作業に勇敢な支援を
提供されました　日本の寛大さはメキシコ国民の記憶に刻まれ　永遠に残ることでしょう

東京　日本　2017 年 9 月 28 日

カルロス・アルマーダ
駐日メキシコ大使

駐日メキシコ大使感謝状

４．報道資料

報道資料

(1) 「メキシコ、国際援助に『心から』感謝」（ラ・プレンサ紙：9 月 21 日付）
（21 日、国連総会で演説したビデガライ外相の発言を紹介）
日本は頻繁に地震を経験している国であり、素晴らしい経験とチームを有している。大変迅速に対応頂いた。空路 14 時間もかかる遠隔地であるが、援助隊は既にメキシコにいる。専門家だけでなく（高い）技術も連れてきてくれている。

(2) 「日本人が感動を呼ぶ」（レフォルマ紙：9 月 25 日付）
24 日、日本の救助隊は国や言語の違いを超える連帯を示してくれた。彼らは寡黙で規律正く、その「心」をメキシコ国民に伝えるのに言葉を必要としない人々である。体格は小柄なるも、トラルパンの集合住宅倒壊現場では 15 時間以上にわたり働いてくれた。人か動物かを問わず、生命の救出に全力を尽くす姿を見せてくれた。24 日午後、同隊は犬を救出したが、寡黙にして精緻な対応ぶりであった。周囲の人々は拍手し、涙を流す者もいた。悪いニュースばかりのなか、日本隊はメキシコ国民に喜びをもたらした。彼らは現場撤収に際し、整列して黙祷し犠牲になった方々に敬意を表した。その後、拍手のなか、日本語で謝意が書かれたプラカードに微笑を見せながら去って行った。

(3) 「日本の救助隊はなぜわれわれを惚れさせたのか」（エル・ウニベルサル紙：10 月 2 日付）
日本の緊急援助隊は「がんばろう、メキシコ」とのメッセージを残して帰国した。9 月 19 日の地震に対しては、多くの国がメキシコに援助隊を派遣してくれたが、秩序だった行動、規律、敬意、親切さ等を巡り、日本隊の評価が際立っており、同隊の帰国後も、SNS 上では日本（隊）に対する評価・感謝の表明や「日本（隊）に惚れた」との書き込みが絶えない。同隊は作業現場で遺体を収容した際、ヘルメットを脱いで黙祷をささげ犠牲者への敬意を示した。現場でメキシコ国歌が歌われた際には一緒に歌った。犬の救出場面も多くのメキシコ国民の心を打った。アルマダ駐日メキシコ大使は同隊につき、ハイレベルの国際認証を有する能力の高い集団であるうえ、真摯で規律正しく、秩序だった仕事ぶりで知られる点を指摘しつつ、かかる隊を送り出した日本の社会における秩序正しさや清潔さ、人々の丁寧さは印象的である旨述べた。また、今般の地震に対する日本の協力の重要性を強調しつつ、緊急援助隊の派遣のみならず、今後も日本国政府との間で震災からの復興や災害の予防に係る協力を行っていくべく協議している旨述べた。

（4）JICA 広報室及び在メキシコ日本大使館による SNS の事例

JICA 広報室 TW（結団式・出発）

JICA 広報室 FB（犬の救出）

在メキシコ大 TW（犬の救出）

川崎団長による感謝メッセージ動画

５．活動日報

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 21 日　第 1 報

１．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
12:30	第 1 陣 32 名メキシコシティ国際空港到着。到着ロビーにて盛大な拍手喝采を受ける。第 2 陣は 15:24 に到着
14:19	ナショナルトレーニングセンター（アニール 550）到着。メキシコ政府とのコーディネーション会議出席。活動サイト（現場①：6 階建てマンション・パンケーキ状態）の要請を受領 会議後、救助犬を含む 11 名を先遣隊として派遣。残りの隊員は BoO 予定地の日墨会館へ移動
16:40	BoO（指揮本部拠点）用地（日墨会館）到着。第 2 陣 38 名もほぼ同着
17:35	先遣隊情報：ドッグサーチの結果要救反応あり。
18:40	1 中 1 小現場①出発。20:42　2 小隊が資機材とともに現場①出発
20:11	内務省市民保護局から至急対応要請あり（現場②）、2 中を派遣する旨回答
21:38	2 中隊現場②へ向けて出発
22:00	LEMA（現地災害対策本部）協議
22:40	現場①で足部確認
22:40	現場②付近でガス漏れ規制線があり前進できず。
23:40	2 中隊現場②到着。4 階建てマンション倒壊。米国、イスラエル、メキシコとともに 4 分割のうえ、活動開始予定
01:20	現場①要救の救出作業の様子を現地 TV 生中継
01:50	現場②雨のため作業中断。天候回復しだい再開予定
02:21	現場①阪本医師により要救の死亡を確認。ご遺体への黙祷、軍への引き渡し

２．特記すべき活動

・大使館、JICA 事務所、前日入りした JDR（国際緊急援助隊）事務局からの調査チーム員による受入支援による円滑な活動立ち上げ。
・地元の軍や警察の救助活動の支援に入り USAR（都市型捜索救助）チームとしての専門性を生かした活動実施。
・資機材、救助犬ともに予定どおり円滑な輸送完了。ヘビーチームとしての 2 現場活動を実現。
・治安については懸念されたが、軍・警察との共同活動による安全確保を前提に 24 時間体制での活動は可能。
・日墨会館の全面的な支援に基づき、BoO は同会館の建屋を利用（構造評価専門家による安全診断実施）。断続的な豪雨が続いているなかで、活動環境の負担減少に貢献。
・メキシコ当局によれば、モレロス、プエブラ両州での救助活動は終了。メキシコシティに絞った捜索救助活動を実施中。38 カ所の倒壊現場に絞り込み活動中であるが対象サイト数は活動の進展に

応じ減少中。

３．隊員の健康状態等

・水、電気は問題ない。通信環境はやや不安定な点もあるが携帯電話での連絡に問題なし。
・隊員の健康状態に特段の問題なし。

４．メディア取材対応

・メキシコシティ到着時には多数の現地マスコミ及び現地市民の方から熱狂的な歓迎を受けた。空港ロビーにて団長がぶら下がり取材に対応。21 日夜、NHK から現場取材要望あり、22 日の朝に連絡する旨回答。

５．明日の活動予定

・本日夜の LEMA 協議により市内南部のトラルパンでの活動要請あり、1 中による対応を予定。
・午前 9 時にメキシコ市長舎において市長による海外救助チーム代表者との面会予定（団長出席予定）。
・19 時に LEMA への活動報告。

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 22 日　第 2 報

１．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
3:00	1 中撤収開始。4:15　BoO 到着
3:23	3 小帰投開始。3:46　BoO 到着。4 小は現場②（アルバロ・オブレゴン）で待機
5:57	3 小 BoO 発。現場②
7:12	現場②で 3 小と 4 小の交代完了。4 小帰投開始
8:33	4 小 BoO 発
9:18	1 中 BoO 発。市内南部の現場③（トラルパン）へ
10:00	メキシコシティ市長表敬
10:10	ドッグサーチ、構造評価
10:34	1 中現着（トラルパン）。うめき声が聞こえたとの情報あり。
12:25	1 中集音マイクで 3F からうめき声確認。4F から 3F に搬入
12:58	2 中ブリーチング継続
13:00	1 中集音マイクによる呼びかけに対し打音を確認
15:30	2 中他のサイト転進のため撤収開始
16:40	2 中撤収完了、現地発。17:38　BoO 着
19:00	LEMA 協議
21:00	2 中 BoO 発、21:55　2 中現着
23:12	1 中 BoO 帰着。休息のうえ、翌日 7 時に活動再開予定
0:07	メキシコチームの電磁波探査により生体反応あり。 その後打音反応あり。打音方向に進む予定
0:25	サイレントタイム実施、JDR 担当箇所の右方向に打音反応あり。
3:10	サイレントタイムに反応なし。
3:20	側面からファイバースコープにて検索するも発見できず。屋上から縦穴開口し、底から横方向 2.5m 進入するも梁にクラックあるためショアリング実施中。4:00 より 2 時間交代で小隊運用

２．特記すべき活動

・2 中の現場②（アルバロ・オブレゴン通り 286）での活動については、15:30 に米国、イスラエルから重機による瓦礫撤去の申し入れがあり（生存者なし、遺体収容が目的）、日本側についても一連の生存者捜索が終了したので撤収を決定。BoO 帰還後、1 中の活動サイトにおいて、2 個中隊交代での活動を実施中。

・現場③（トラルパン通り）については、打音反応を受けて、竪穴→横穴を開削中。パンケーキクラッシュであり、クラックが入った梁を越えて進入するためのショアリング実施をはじめ、万全な安全対策が必要となるため要救到達までには相当時間がかかる見込み。2 個中隊交代により、23 日朝

まで徹夜で救出作業継続中。
・午前 10 時からミゲル・アンヘル・マンセラ市長と国際 USAR チームリーダーの面会が行われ、川崎団長が出席した。同市長からは日本を含めた各国の支援に謝意が述べられたが、その際、部屋内の大型モニターで、JDR 救助チームがアルバロ・オブレゴン通りで活動する様子がライブで映し出され、市長から特に日本の活躍ぶりに言及があった。
・22 日未明の現場①（ブリターニャ・サイト）でのご遺体搬出作業時に JDR 救助チームが黙祷を行った場面がメキシコ国内で生中継され、国内で感動を呼んでいる。

３．LEMA 会議（19:00）

各国が昨晩からの活動をアップデート。JDR はブリターニャ・サイトでの遺体収容と救助活動終了及びアルバロ・オブレゴン通り 286 サイトでの活動終了並びにトラルパン区のサイト（集合住宅）での捜索救助活動の状況を報告。米国、イスラエルからはアルバロ・オブレゴン通り 286 サイトにおいて作業を続けているがこれ以上の生存確認はできない旨の発言あり。小規模国内救助チームを中心に、活動サイトの治安が若干悪くなっていること、また軍・警察によるレスキュワーの排除が続いていること（地元レスキュワーの格好で住宅を訪ね避難を勧告し、空き巣を働く事案が発生しているのも原因になっているのではないかとの見方もあり）に対する苦情があった。また、新たなタスクの割り振りは 2 件にとどまった。LEMA からはこれ以上の生存者の確認は厳しいとの意向が示され、活動終了に伴う報告書提出についての説明が行われるなど、捜索救助フェーズが終わりに近づいているとの印象を得た。LEMA の強い要求に基づき、23 日より JICA メキシコ事務所職員をリエゾン要員として LEMA に配置予定。

４．隊員の健康状態等

・3 現場とも完全なパンケーキクラッシュであり ASR4 として長時間の救助活動を余儀なくされているため、隊員の士気は依然高いものの若干の疲れが蓄積されている。BoO での休憩時にホットシャワーを用意することでリフレッシュを図るほか、適切な休憩時間の確保に努めている。BoO である日墨会館からは、食事、リフレッシュメントの差し入れや通訳人材の紹介など極めて厚い支援を頂いており、隊員の健康維持に大きな貢献となっている。

５．メディア取材対応

・JDR 救助活動が一段落したところで現地報道関係機関に対する取材対応を行う方向で大使館と調整中。
・日本の報道機関については個別の依頼に応じて適宜対応予定。

６．明日の活動予定

・本日夜の LEMA 協議により市内南部のトラルパンでの活動要請あり、1 中による対応を予定。
・12 時に LEMA 会議を予定。

トラルパンにおける救助活動

ブリターニャにおける救助活動

ブリターニャにおける救助活動

ブリターニャにおける救助活動

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 23 日　第 3 報

1．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
00:42	2 中隊より状況報告（トラルパン）。メキシコチームの電磁波探査により、生存反応あり。0:25 サイレントタイム実施の際に打音反応あり。
04:40	建物上屋安定化のためクレーン及びワイヤを使用し崩落防止作業開始
06:40	1 中隊から 2 中隊へ引き継ぎ開始
07:55	メキシコ国内オアハカ州にて M6.2 の地震が発生。全隊員の安否を確認
08:55	オアハカ地震による活動への影響確認。市民保護局よりトラルパンにおける活動の一時停止の通告あり。
09:07	トラルパンでの活動が全面的に停止される方向
09:17	BoO にて情報共有会議を実施。団長から副団長及び中隊長、中隊長サポートへトラルパンでの活動が停止された旨情報共有。1 中隊に対しては BoO への帰隊命令（BoO 到着 10:20）
10:35	LEMA 会議に向けて団長、中末副団長、山根副団長、勝部が BoO を出発
14:00	LEMA 会議での情報共有・調整を経て、トラルパンで日本、メキシコ、イスラエルの 3 チームの構造評価専門家を派遣して合同で構造評価を行い、安全管理の観点から活動再開の検討を行うことで合意。15:30 を集合時間と決定
14:41	構造評価メンバー（鈴木副団長、2 構造評価専門家、2 中隊長、篠、勝部）が BoO を出発
15:30	日本側メンバーが現地到着後、LEMA 会議での合意が履行されておらず、メキシコ側ボランティアチーム、イスラエル、Coordination Civil、アネクシットなどが既に活動を開始していたことが発覚。現場にて抗議
15:50	業務調整員（石坂、湊）及び通訳が救助犬帰国時手続き調整のために空港へ出発
16:40	抗議の結果、イスラエル、メキシコシティ、JDR の 3 者で合同構造評価を開始
17:50	構造評価の結果、第 2 中隊を充ててトラルパン現場を再開することを決定
18:17	第 2 中隊、BoO 出発。団長は LEMA に向けて関係各者と前述の合意事項について協議するため出発
18:45	団長 LEMA 着、市民保護局、外務省、イスラエル関係者にトラルパンでの合意不履行を通知、信義違反を抗議
19:25	2 中隊到着ののち、資機材展開、活動開始
19:35	団長に対し、カルロス・デ・イカサ外務次官、アブラハム・サモラ外務大臣首席補佐官（大臣代理）から電話にてトラルパンでの合意違反について謝罪あり。
20:00	外務次官及びアネクシット局長が現場を激励訪問 LEMA では団長がイスラエルチーム団長と会談（イスラエル側から内部の連絡

	ミスによる不適切な行動に対する謝罪と再発防止が伝えられた）
20:55	2 中隊活動状況 : ドッグサーチをかけた結果反応はないが犬が気にしている方向があり、同方向を検索
01:00	ドッグサーチを中心にサーチ活動中
02:00	1 中隊 BoO 出発
03:40	2 中隊からの引き継ぎ完了。デジカメの画像伝送で内部を確認する。
03:51	ドッグサーチ反応なし。ファイバースコープで探索を行う。

２．特記すべき活動

・トラルパンにおける活動を巡り、活動の中止が具体的根拠に欠けたまま一方的に決定されたため、LEMA 協議において理由の確認と再発防止を申し入れた。

・7:55 に発生した余震は BoO ではほとんど揺れを感じることはなかったが、直ちに安否確認を実施するとともに、緊急時の活動方針確認を適宜実施した。

３．LEMA 会議（12:00）

LEMA 会議は 12:00 から開催された。出席各チームとも生存者救出情報なし。メキシコ政府側は捜索救助フェーズの終了を明言するには至らなかったが、今後は生存者捜索の可能性のあるサイト割り当ては行わないこと、現在のサイトでの活動継続に意義があると考えるチームのみ残り、それ以外は撤収すべきと発言するなど、事実上の捜索救助フェーズの終了状態にあると考えられる。

団長からオアハカ地震後のトラルパン活動停止に際するメキシコ側の説明（要救助者なし）に対して同説明の不適切さに遺憾を表明するとともに根拠について説明を求める。

４．隊員の健康状態等

・派遣開始以来、昼夜を通した活動が継続しており、疲労の蓄積が心配されるが、隊員の士気は引き続き高い。

・隊員ではないが外部要員（通訳）の過労や高所帯同せざるを得ないケースがあり、負担をかけない運用体制が必要。

５．メディア取材対応

・時事通信から取材問合せ 1 件。

６．明日の活動予定

・トラルパン現場に対して継続して捜索救助活動を実施する。

・メキシコ側の要求に基づき、12 時の定例 LEMA 会議までに活動報告書を提出予定。

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 24 日　第 4 報

1．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
00:00	前日から引き続き 2 中隊によりトラルパンでの捜索活動を継続
01:58	捜索中の部屋から写真と ID を発見。要救助者の身元確認のため一時現地指揮所で保管するが、その後の扱いはリエゾンに相談
02:00	1 中隊、現場交替のため BoO を出発
03:40	2 中隊から 1 中隊への引き継ぎ完了。ドッグサーチ開始 デジカメの映像伝送で内部確認するも電波が現地指揮所に届かず。
03:51	ドッグサーチ反応なし。ファイバースコープで探索開始
04:00	2 中隊現地出発
04:18	メキシコ隊と思われる救助隊が隣のサイト（同一建造物）から遺体搬出
04:21	2 中隊 BoO 着
06:01	現場交替のため、ロジ（勝部）、通訳、通信班（杉浦）BoO 発
06:40	瓦礫崩落及び建物東側で 1cm の沈降を確認。緊急避難。レーザーによる計測間隔を短くし安全確認強化
07:15	退避後 10 分間隔で 30 分計測。異常なし。捜索再開
07:30	ロジ班、通訳、通信班現着
07:36	ペントハウスで 4cm のずれを確認。作業中断。ペントハウス吊り上げ用クレーンによる作業終了まで捜索を中断（クレーンは未着）
09:40	1 中隊建物内より犬の鳴き声を確認
10:05	2 中隊 BoO 発
10:06	1 中隊、状況確認のため中隊長含む 3 名で屋上に上がった際に 4 階部分から進入するために設けたホール内に犬を発見。捕捉を試みるも捕まえられず。
10:37	2 中隊に引き継ぎ完了。
10:42	団長、山根副団長、大使館員、JICA 事務所長、LEMA 会議に向けて出発
11:05	1 中隊現場発
11:34	1 中隊 BoO 着
15:09	チーフハンドラー及び隊員 1 名が進入し、犬を確保
15:15	飼い主に引き渡し完了
15:51	レスキューレーダで検索実施。呼吸なし、運動体あり。ドッグサーチは反応なし。運動体はなんらかの反射と考えられるため、生命体がないと判断
16:00	検疫書類受領のため石坂業務調整員が空港へ出発
16:50	救助活動終了、撤収開始
18:10	2 中隊 BoO 到着
19:00	団長、山根副団長、LEMA 会議出席

20:58	指揮本部ミーティング
21:20	全体ミーティング

２．特記すべき活動

・前夜から夜を徹して引き続きトラルパンにおける捜索活動を継続した。倒壊建物の不安定化の増大により、複数回の中断を挟みながらの困難な活動であったが建物内に取り残されていた犬を 15:09 に生体で救出。周囲で見守っていた地域住民から大歓声が上がった。また、この救出の様子はメキシコで最も信頼の高い 6 時のニュース番組でトップニュースとして報じられた。

・上記の活動における犬の救出（生存、飼い主に引き渡し）後、サーチを行った結果明らかな生体反応がみられないことから同サイトでの活動を終了。メキシコ政府からの新たな生存者捜索救助サイトの割り当てもないことから、これに合わせて本派遣における捜索救助活動を終了した。

３．LEMA 会議（11:00/19:00）

・トラルパンにおける崩壊建物の固定・安定化のためのクレーン車手配を要請。

・各救助チームのこれまでの活動について報告と撤収予定について照会。

・LEMA からの要請に基づく各国の撤収（帰国）予定は以下のとおり。

- 米国：26 日以降〔実際には撤収フライトもあり 27 日になる模様（遅くても 28 日）〕
- イスラエル：水曜日。ただし、構造評価の専門家（10 名）については必要に応じて残留可能。
- エクアドル：本日（24 日）中。
- スペイン：撤収予定なし（スペイン人の行方不明情報あり）。
- コロンビア：撤収予定なし。
- ベネズエラ（本日到着）：LEMA からは捜索救助活動は必要ない旨告げられた。

・わが方の活動について、これまでの 3 カ所での捜索・救助活動報告を行い、既に終了していた 2 カ所に加え最後のトラルパンでの本夕の犬の生体救出成功を報告した際には会議参加者から歓声が上がった。あわせてメキシコの定める様式に沿った活動実績資料を提出。

・今後撤収するチームには出国時の VIP 出国手続きを適用する。

・会議終了後、外務省/国際開発協力庁オウガスティン長官から団長に対し、今次支援への心からの感謝として外務大臣がお礼を直接伝えたく、翌 25 日の午前 10 時より外務大臣接見の場を設けるとともに、夜には空港そばの施設においてメキシコ政府主催の壮行会を予定しており、いずれも JDR 救助チーム全員で参加していただきたいとの招待があった。

４．隊員の健康状態等

・派遣開始から昼夜を問わず行った活動からの疲れが見えるものの、夜半に行われたミーティングで捜索救助活動の終了が団長から告げられると、充実した活動に満足感や達成感を感じている様子で BoO にてリラックスしていた。

５．メディア取材対応

・テレビ朝日より電話問合せ 1 件。

６．明日の活動予定

・10:00 からメキシコ合衆国外務大臣接見
・13:00 から資機材整備実施
・14:00 からメキシコ海軍による資機材視察受入れ
・16:00 から記者懇談会を実施
・18:30 から日墨協会主催による壮行会
・21:30 からメキシコ合衆国政府による壮行会
・第 1 陣メキシコ出国（離陸予定：翌 1:50）
・第 2 陣のメキシコ出国は 27 日を予定

犬の救出場面

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 25 日　第 5 報

1．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
～08:00	起床、朝食、荷物及び BoO 内整理
8:30	外務大臣による激励訪問へ出発
11:00	外務大臣による激励訪問実施
12:20	BoO 着、昼食
13:30	資機材メンテナンス実施
13:45	構造評価専門家による BoO 用建造物の検査実施
14:00	メキシコ海軍資機材視察受入れ
15:30	記者会見受付開始
16:00	記者会見
18:30	日墨協会主催の送別会
20:00	メキシコ政府主催の送別行事に向け BoO 出発
21:55	メキシコ政府主催の壮行行事
22:45	帰国第 1 便搭乗者、空港内へ移動
23:40	BoO 着
23:45	指揮本部ミーティング実施
00:10	業調ミーティング実施

2．特記すべき活動

・メキシコ政府外務大臣が激励訪問。10 時に予定されていたが 11 時からの実施となるも、隊員全員と握手をされ、感謝の意が示された。また、会場はスペインチーム及び米国チームが BoO を設営しており、他チームの様子も知ることができた。
・外務大臣訪問から帰隊した際に、傭上ドライバーの子どもから手造りのアクセサリーを手交され、本災害に対する日本からの支援に謝意を示された。
・資機材メンテンナンス最中にメキシコ海軍から 4 名の視察者が BoO を来訪。JDR が保有する資機材について、その使用方法等について中隊長 2 名が説明実施。なお、メンテナンスは捜索救助資機材、生活資機材ともに問題なく終了。
・BoO 内にて記者会見を実施。8 社（毎日新聞含む）9 名が参加し、活発な質問がなされ、その際にはどの記者からも日本への深い感謝の意が述べられていた。
・日墨会館主催の壮行会では、今般の派遣でお世話になった多くの方が参加され、終始和やかな雰囲気であった。傭上通訳が一度もメキシコの日常に触れられない隊員のためにタコスをふるまってくれ、また、日墨会館からは盛大な料理とともに最後には記念品（帽子）を隊員全員に用意しており、非常に温かい送別会となった。
・連邦警察施設内（空港併設）にてメキシコ政府主催の送別行事に出席。国歌演奏やあいさつのほか、

エンブレムの交換等、こちらでも非常に温かな対応を頂いた。

３．LEMA 会議

開催なし。

４．隊員の健康状態等

・医療班による帰国前健康診断実施

・レスキュー隊員、構造評価専門家らは現場活動がなくなり、疲れが少し回復しているように見受けられるものの、帰国に向けた準備やルーティーンワークで業務量が減らない業務調整員の慢性的な睡眠不足と疲れが顕著。

５．メディア取材対応

・記者会見（8 社 9 名参加）

・空港でのメキシコ政府による送別行事では多数のメディアが参加。ぶら下がり取材等はなし。

６．明日の活動予定

・9:00 から最終資機材整備

・13:30 から BoO 用地で利用した日墨協会の大掃除

・20:30 空港へ移動

・第 2 陣、第 3 陣メキシコを出国（翌未明）

記者会見の様子

地元の少女からペンダントを受け取る隊員

メキシコ政府による壮行会

メキシコ地震国際緊急援助隊・救助チーム派遣日報
9 月 26 日　第 6 報

１．本日の活動

時間（すべてメキシコ時間）	活動内容
～8:00	起床、朝食、荷物及び BoO 内整理 資機材整備、受託荷物整理、物品対査作業
8:15	団長、副団長、中隊、メキシコシティ市長報告へ出発
9:00	メキシコシティ市長への報告実施
11:00	在メキシコ日本大使報告
12:20	BoO 着、昼食
13:00	日墨会館大掃除
14:00	小隊ごとミーティング、他機能とのコミュニケーション
14:30	メキシコ事務所への資機材返送時検品方法ブリーフィング
16:00	日墨協会への記念品贈呈セレモニー
17:00	夕食
19:00	個人、携行荷物パッキング完了
20:00（予定）	救助犬出発
21:00（予定）	第 2 陣全員出発
01:50（予定）	エアメヒコ発
02:20（予定）	ANA 発

＊第 1 陣は日本時間 6:30 過ぎに成田空港に到着済み。

２．特記すべき活動

・団長よりメキシコシティ市長に対し、JDR の活動報告を行ったところ、市長からは JDR の活躍にメキシコ市民が大変勇気づけられた、と謝意が示された。
・大使館が発信している SNS への反響は非常に大きく、JDR の活動に関して投稿されるコメントも好意的なものばかりであった。アジアからは日本のみが派遣を実施したが、今回の活動はメキシコの期待に十分応えることができた、と大使から発言があった。
・お世話になった日墨会館、関係者の皆様への感謝の気持ちを込めて救助隊員全員で清掃活動を実施した。
・日墨会館にある移住者の慰霊碑を前にセレモニーを開催。多大なる支援を頂いた日墨協会全関係者に対し感謝をお伝えし、記念品を贈呈した。

３．LEMA 会議

参加なし。

４．隊員の健康状態等

・レスキュー隊員は久しぶりの十分な睡眠がとれ、体力の回復が図れた。

５．メディア取材対応

特になし。

６．明日の活動予定

・8:30 から成田空港にて解団式

・平野隊員は帰国を延期し、事務所にて救助チーム資機材返送業務の実施を支援

お世話になった日墨協会へ記念品を贈与

お世話になった日墨協会へ記念品を贈与

在メキシコ大使館への活動報告

市長へ JDR 帽子の贈呈

国連人道問題調整事務所による状況報告書

Mexico: Eartquake 7.1 USAR teams snapshot

(As of 02nd October 2017)

OCHA

What are the USAR teams?

USAR (Urban search and rescue) involves the location, extrication, and initial stabilisation of people trapped in a confined space or under debris due to a sudden-onset large-scale structural collapse such as an earthquake.

The goal of search and rescue operations is to rescue the greatest number of trapped people in the shortest amount of time, while minimising the risk to rescuers.

How does INSARAG support?

INSARAG (International Search and Rescue Advisory Group) facilitate coordination between the various international USAR teams who make themselves available for deployment to countries experiencing devastating events of structural collapse due primarily to earthquakes.

USAR TEAMS IN OPERATIONS

As of 28th September 2017, there were 20 national and international USAR teams in operations in Mexico City and the state of Morelos.

As of 02nd October 2017, the Colombian and Spanish USAR teams are still developing activities in Mexico City.

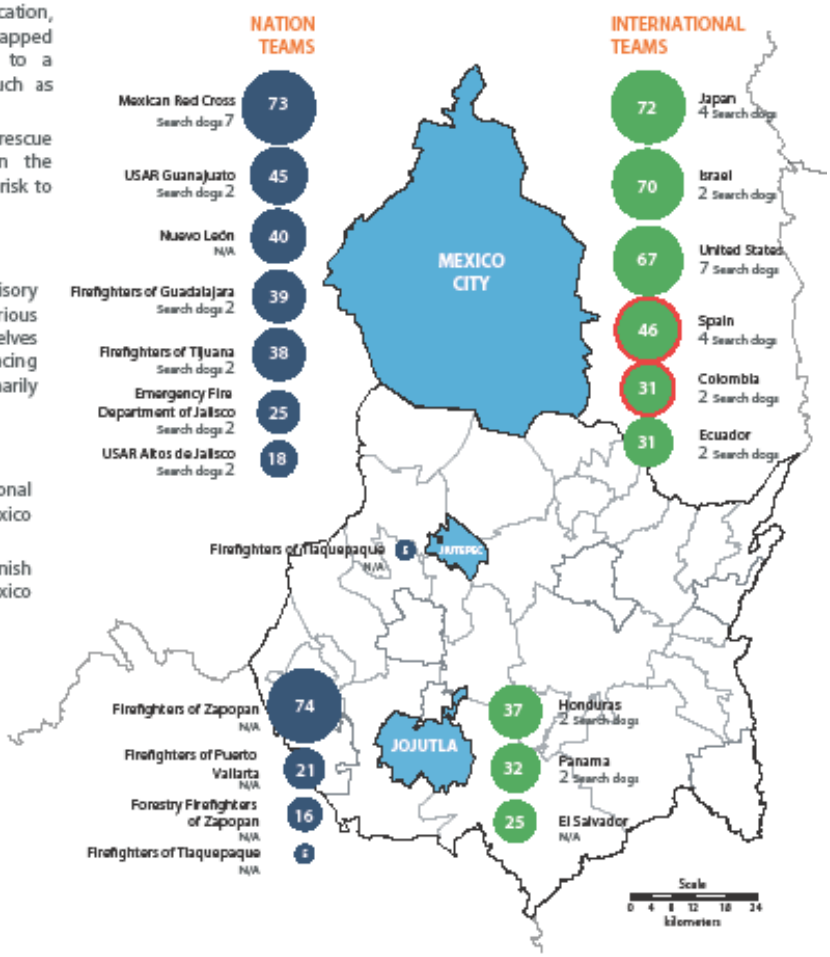
NATIONAL TEAMS

11 National teams

394 Staff deployed

17 Search dogs

Map 1. National and international USAR teams with activities in Mexico and number of staff for each team



Map 2. Countries that deployed USAR teams to Mexico

INTERNATIONAL TEAMS

9 International teams

411 Staff deployed

25 Search dogs

The boundaries and names shown and the designations used on this map do not imply official endorsement or acceptance by the United Nations.
The numbers presented are for orientation and not conclusive.

Sources: Command post in Mexico City and Morelos, INSARAG.

Comments: ocha-rolac@un.org www.unocha.org www.reliefweb.int www.redhum.org

With the support of

メキシコ合衆国政府に提出した報告書

Japan Disaster Relief Rescue Team

Operation Report to the Government of United Mexican States

25 September, 2017

Your Excellency,

Please kindly accept our report attached to this letter.

The Japan Disaster Relief (JDR) Rescue Team, consisting of 72 Japanese members, has been sent to Mexico for the search and rescue activities by the Government of Japan since 21 September, 2017 based on the request of the Government of United Mexican States.

The JDR Rescue Team carried out search and rescue activities in Mexico City.

We sincerely appreciate your cooperation extended for us to implement the activities throughout our stay here in Mexico. I am confident that the people and the Government of United Mexican States will overcome this severe challenge caused by the earthquake and get the people's daily life back to normal very soon.

Sincerely yours,

Toshihide Kawasaki
Leader, Japan Disaster Relief (JDR) Rescue Team

I. Mission overview:

Following the request by the Government of Mexico, the Government of Japan decided to deploy Japan Disaster Relief Rescue Team (hereafter: the Team) on 20 September, 2017, Japanese standard time. The Team entered in Mexico City on 21 September, and rapidly started its operation through the coordination mechanism set up by Department of Civil Protection.

During its operational period, the Team conducted search and rescue activities in Mexico City. As a result, the Team recovered one dead body at Bretaña, located in the center of Mexico City.

II. Government request for deployment of Japan Disaster Relief Rescue Team and the team mobilization

The earthquake occurred on the central area of Mexico on 19 September 2017. The incident caused devastating damage to the surrounding areas including Mexico City. The Government of Mexico requested for deployment of Japan Disaster Relief Rescue Team to the Government of Japan on the same day. The Team was then deployed, using a commercial flight to Mexico City on 21 September.

III. Operation

The Team set its Base of Operation at Asociación México Japonesa, A. C.. In accordance with bilateral request by the Government of Mexico, the Team conducted following operations;

1 Bretaña 81 (6 story apartment)

Upon arriving at Mexico City International Airport on 21 September, the Team immediately received a request for search and rescue at Bretaña 81 in the coordination meeting with the Mexican authorities and promptly dispatched an advance unit including rescue dogs, and followed by main unit. After conducting a dog search, the Team removed debris and extricated one victim from rubble in the early morning of 22 September. After extrication, a doctor of the team confirmed the decease, and the body was handed over to the Mexican government.

2 Álvaro Obregón 286 (7-story office building)

In the night of 21 September, upon request from the Government of Mexico for urgent rescue operation at Álvaro Obregón, a unit was dispatched immediately. The site was divided into four with the rescue teams from USA, Israel and Mexico and carried out relief activities in collaboration. We carried out dog search and breaching on the rooftop over a long time, but it did not lead to the discovery of survivors, with the deterioration of the activity environment due to a wave of heavy rain. The Team decided to withdraw from this site in order to concentrate all of the two units on another work site (Tlalpan 3) when it was decided by Israel team to shift to debris/garbage removal work by heavy machinery for the purpose of accommodating dead bodies (in the evening of 22 September).

3 Tlalpan 3 (6 story apartment)

Upon receiving a request from the Government of Mexico at the coordination meeting in the evening of 21 September, a unit which completed rescuing at Bretaña 81 in the morning of 22 September was promptly dispatched. In the search activity using the sound collector, the moaning voice and the tapping reaction heard from the third floor were confirmed. The drilling work of the side hole to approach the collapsed floor from the vertical hole entering from the 4th to the 3rd floor was carried out. After an overnight rescue operation, temporary withdrawal of the units were obliged. Following order of suspension of rescue activities by the Mexican authorities because of the risk of further collapse by the aftershock occurred in the morning of 23 September (M6.1) despite the voices of local residents appealing for the continuation of activities of the team. After a site safety assessment carried out in accordance with instruction by the Mexican authority, rescue activities of the Team resumed in the evening of 23 September. Rescue working was continued at Tlalpan 24 hours until the evening of 24 September and a dog was found and rescued alive. As no further vital sign was confirmed by the dog search, JDR completed the Urban Search and Rescue works at 16:50 on 24 September.

IV. Acknowledgment

Our mission has been carried out along with the Government of Mexico and other partner communities and organizations. Without their great supports and cooperation, we could not have accomplished this mission. We are deeply impressed by solidarity and efforts of the people of Mexico for rescue and recovery, as well as dedicated work of staff even in the hard time. We highly appreciate the cooperation and the supports of the government and people of Mexico. We sincerely hope that our activities will contribute to the recovery from the earthquake as well as to the further development of the friendship between the governments and people of Mexico and Japan.

Attachments:

1. Team member list
2. Japan Disaster Relief Team operation schedule

Attachment 1

JDR Rescue Team member list

1	Kawasaki	Toshihide	Team Leader
2	Oishi	Mitsuyasu	Deputy Team Leader
3	Suzuki	Takeshi	Deputy Team Leader
4	Nakasue	Yosuke	Deputy Team Leader
5	Yamane	Makoto	Deputy Team Leader
6			Communication
7			Communication
8			Handler
9			Handler
10			Handler
11			Handler
12			Handler
13			Unit Leader
14			Deputy Team Leader
15			Squad Leader
16			USAR Specialist
17			USAR Specialist
18			USAR Specialist
19			USAR Specialist
20			USAR Specialist
21			USAR Specialist
22			USAR Specialist
23			USAR Specialist
24			USAR Specialist
25			USAR Specialist
26			USAR Specialist
27			USAR Specialist
28	Kinoshita	Osamu	Unit Leader
29	Asami	Kenichi	Unit Leader Support
30	Yoda	Tsuguo	Squad Leader
31	Hiratsuka	Kazuhiro	Squad Leader
32	Kobayashi	Hirokazu	USAR Specialist
33	Tabata	Kenji	USAR Specialist
34	Saito	manabu	USAR Specialist
35	Sasa	Shinya	USAR Specialist

36	Iwasa	Osamu	USAR Specialist
37	Kimata	Tomoyuki	USAR Specialist
38	Nakagawa	Kazumasa	USAR Specialist
39	Takenaka	Ryugo	USAR Specialist
40	Hirai	Kosuke	USAR Specialist
41	Ogura	Hiroki	USAR Specialist
42	Kajimoto	Atsushi	USAR Specialist
43	Asakawa	Taichi	USAR Specialist
44	Kamiryo	Naohito	USAR Specialist
45	Miyaji	Tatsuhiro	USAR Specialist
46	Masuoka	Kazuaki	USAR Specialist
47	Gonda	Akifumi	USAR Specialist
48	Otsuka	Shohei	USAR Specialist
49	Motouchi	Ryota	USAR Specialist
50	Gondai	Masahiko	USAR Specialist
51	Sato	Eiichi	USAR Specialist
52	Kato	Atsushi	USAR Specialist
53	Hamada	Hiroya	USAR Specialist
54	Sakata	Shigenobu	USAR Specialist
55	Watanabe	Tsubasa	USAR Specialist
56	Nishimura	Naoya	USAR Specialist
57	Inoue	Junichi	Doctor
58	Shirokawa	Masamitsu	Doctor
59	Sakamoto	Taigo	Doctor
60	Yamaguchi	Naoki	Nurse
61	Sakamoto	Yoshiko	Nurse
62	Takahashi	Isamu	Structual Engineer
63	Ogura	Takashi	Structual Engineer
64	Hirano	Junichi	Logistics
65	Ishizaka	Tetsuya	Logistics
66	Shino	Katsuhiko	Logistics
67	Takimoto	Tetsuya	Logistics
68	Akiyama	Shintaro	Logistics
69	Katsube	Tsukasa	Logistics
70	Minato	Yusuke	Logistics
71	Nakano	Teruhito	Logistics
72	Arai	Daisuke	Logistics

Attachment 2

Japan Disaster Relief Team operation schedule (Mexican Standard Time)

19 September	Team Deployment Decided
21	Team Departure, Arrival in Mexico; Operation at Bretaña 81 and Álvaro Obregón 286
22	Operation at Álvaro Obregón 286 and Tlalpan 3
23	Operation at Tlalpan 3
24	Operation at Tlalpan 3
25	Courtesy visit to JDR by Minister of Foreign Affairs of Mexico Equipment maintenance,
26	Depart for Japan (First batch)
27	Depart for Japan (Second batch)　Arrive at Japan(First batch)
28	Arrive at Japan(Second batch)